

繪本通俗三國誌

初編上

原叙

卷四

夫史所以載道垂鑑於後世也故其臣
 之善惡政事之得失邦家之治亂人
 事之可與不可一而錄焉凡讀史者
 至其忠實便思自己忠與不忠讀
 勸懲慈懼之心則修身之要豈外焉
 哉嗚呼漢室傾頽之日宦官弄權而



繪本通志三國志

卷四



原叔

所以載道垂鑑於後者也故去臣
 志政事之得失邦家之治亂人
 之之否無不一而錄焉凡讀史者
 至其忠實便思自己忠其不忠
 至其孝實便思自己孝其不孝不
 勸懲怒懼之心則修身之要豈
 哉嗚呼漢室傾頽之日宦官弄權而

壤亂國經奸雄鷹揚而割據州郡
偉哉照烈力起于涿郡結義桃園
顧賢升廬創成大業而使天之猶
知有漢其功可謂大也矣痛秦後主
失德曰僥倖毀忠遂為亡虜而社稷
一旦休豈不惜哉余每讀史未嘗不
嘆息痛恨於世間也况三國人事之
盛衰存鮮及焉而其真偽曲直炳然

於百千載之後者事故晦白本於東
原俗三國志始於漢建寧終於晉大
康雖俚詞蔓況不足以發蘊奧要使
幼學易解高而已洛汭有嘉長公羽
溥樸而好古與手結方外之文累及
請奈錄諸梓而流後昆矣實能不
免刺藤可憐之錯讀之者為有
善以為勸惡以為警則幸予之

原志也哉

元祿己巳孟夏

湖南文山識



明治壬午初冬 石居士笑之書



繪本通俗三國志序

夫誌者記事也。欲易讀而易曉。元祿間。有江南文山子。譯三國志。名曰通俗三國志。梓行既久。蓋又為童蒙史學者。設讀史之階梯。及復文之孝案也。故國字漢字。并用楷書。閭巷童子。仍或不能讀。余常為憾焉。適齊浪速書肆。羣玉堂主。久亦思之。乃欲代改州書。使改易讀。請余校正之。余善其志。同於余。憇懇從。出業卒。之後。主久更使雙窟子。書之。將壽梨棗。仍恐童子難讀。復

使戴斗子。園畫之。改雜於篇間。題曰繪本通俗三國志。冀使兒童。翫其繪而曉其書。蓋其意。猶固好色好戰。改說仁義者乎。刻成之序。遂識其由云。

皆天保六年歲在乙未秋

洛亦

東離亭主之誌



國
爽

關
羽

張
飛

○趙雲字子龍



○馬超字孟起

○吳孫堅字文臺



袁紹字本初



黃巾賊張角

呂布字奉先

董卓字詡

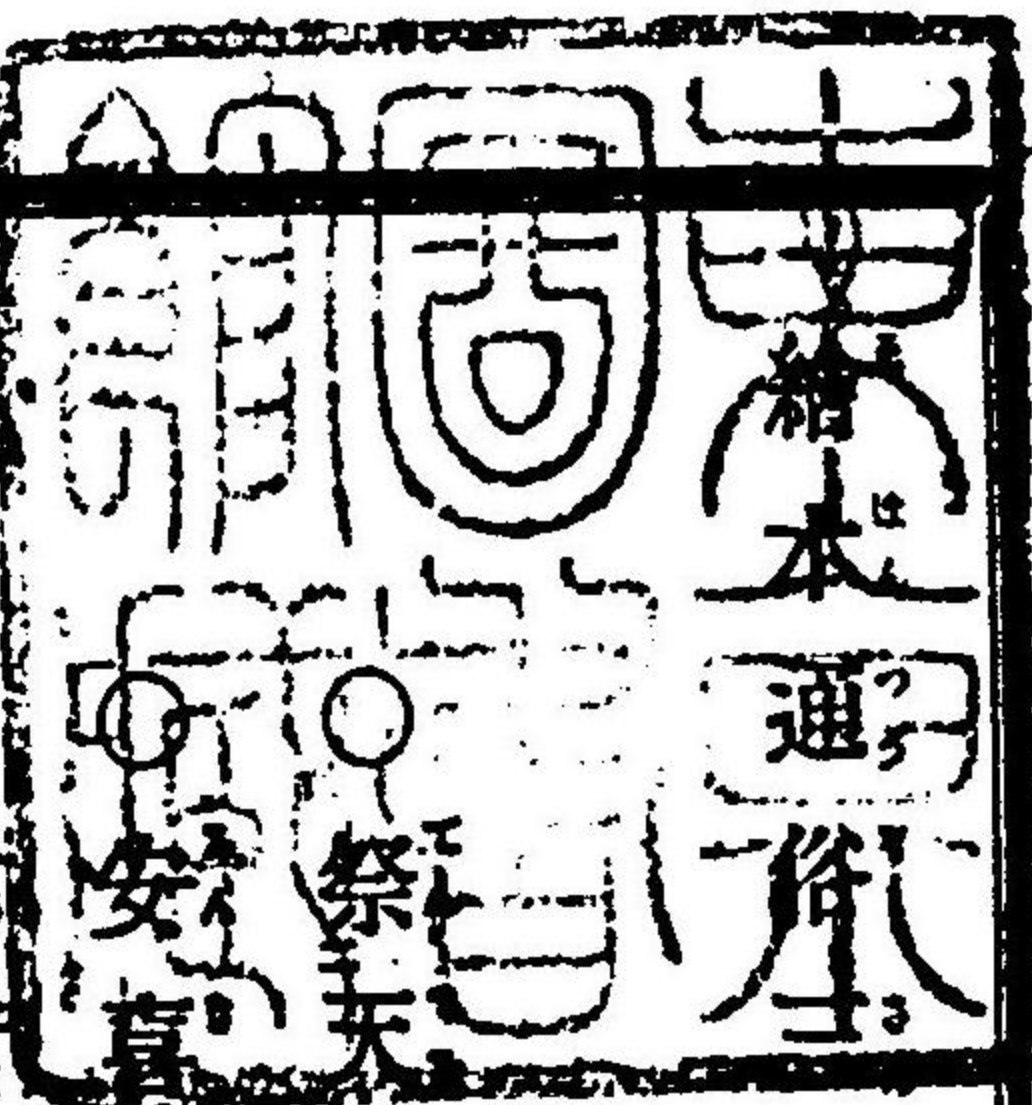
董卓字仲穎





陳留帝

魏 曹操字孟德



國志初編總目錄

○畫像 ○姓氏 ○或問

○祭天地桃園結義 ○劉玄德破黃巾賊

○安喜縣張飛鞭督郵 ○何進謀殺十常侍

○董卓與兵入洛陽 ○呂布刺殺丁建陽

○廢漢帝董卓弄權 ○曹操謀殺董卓

○曹操起兵伐董卓 ○呂布大戰虎牢關

○董卓燒長樂宮 ○袁紹孫堅奪玉璽

○趙雲大戰磐河

初編目錄終

姓氏

蜀

○帝

先主劉備 字の玄德涿郡涿縣の人漢の景帝の玄孫在位三年壽六十三歳

後主劉禪 字の公嗣先主之子在位四十二年壽六十五歳

○后

昭烈皇后甘氏 沛縣の人先主の妾

穆皇后吳氏 陳留の人先主の繼室

敬哀皇后張氏 後主の妻張飛の長女

皇后張氏 後主の繼室張飛の次女

○先主の三男

後主劉禪 劉永 字の公壽魯王の封す 劉理 字の奉孝

梁王の封す

○後主の七男

字の文剛太子 劉瑤 安定王の封す 劉琮 劉環

劉琨 北地王の封す 劉尚 劉球

○劉傳

諸葛亮字の孔明瑯琊郡の人官丞相武鄉侯に至る忠武膽す

關羽 字の雲長河東解良の人官壽亭侯前將軍に至る

張飛 字の翼德涿郡の人官車騎將軍に至る

馬超 字の孟起扶風茂陵の人官驍騎將軍に至る

黃忠 字の漢升南陽の人官國内侯に至る

趙雲 字の子龍常山真定の人官鎮東將軍に至る

龐統 字の士元襄陽の人官副軍中郎將に至る

法正 字の孝直扶風の人官尚書令護軍將軍に至る

許靖 字の文休汝南平輿の人官を歴て太傅に至る

糜竺 字の子仲東海の人官安漢將軍に至る

孫乾 字の功祐北海の人官兼中將軍に至る

簡雍 字の憲和涿郡の人官昭德將軍に至る

伊籍 字の機伯山陽の人官昭文將軍に至る

秦宓 字の子勳廣漢綿竹の人官太司馬に至る

董和 字の幼宰南郡枝江の人官中郎將に至る

劉巴 字の子初零陵丞陽の人官尚書令に至る

馬良 字の季常襄陽宜城の人官侍中に至る

陳震 字の季起南陵の人官尚書令に至る

泣允 字の休昭南郡枝江の人官侍郎に至る

劉封 字無し羅侯冠子の子官副將軍に至る

呂艾 字の季陽南陽の人官尚書令に至る

彭義 字の永年廣漢の人官江陽の太守に至る

李嚴 字の正方南陽の人官前將軍に至る

糜立 字の公淵武陵臨沅の人官長水校尉に至る

劉琰 字の威碩魯國の人官車騎將軍に至る

魏延 字の文長義陽の人官前軍師征西大將軍に至る

楊儀 字の公威襄陽の人官兼中軍師に至る

霍峻 字の仲邈南郡枝江の人官梓潼の太守に至る

王連 字の文儀南陽の人官江陽の太守に至る

向朗 字の巨達襄陽宜城の人官左將軍に至る

張裔 字の君嗣蜀郡成都の人官長史に至る

楊洪 字の季休武陽の人官蜀郡の太守に至る

費詩 字の公舉南安の人官議大夫に至る

杜微 字の國輔梓潼の人官議大夫に至る

杜瓊 字の伯瑜蜀郡成都の人官太常に至る

周郡 字の仲直巴西閬中の人官備校尉に至る

許慈 字の仁篤南陽の人官太常に至る

孟光 字の孝祐雒陽の人官太司農に至る

來敏 字の敬達義陽新野の人官光祿大夫に至る

尹默 字の思潛梓潼の人官大中大夫に至る

李譔 字の欽中梓潼の人官三郡の太守に至る

譙周 字の允南巴西充國の人官中散大夫に至る

郤正 字の令光河南偃師の人官巴西の大夫に至る

董權 字の公衡巴西閬中の人官車騎將軍に至る

李恢 字の德昂建寧會元の人官安漢將軍に至る

馬忠 字の德信巴西閬中の人官鎮南大將軍に至る

王平 字の伯岐巴西南充國の人官益州將軍に至る

張嶷 字の子均巴西宕渠の人官鎮北將軍に至る

蔣琬 字の公琰零陵湘鄉の人官大將軍録尚書事至る

姜維 字の伯約天水冀の人官大將軍に至る

曹魏 字の文偉義陽新野の人官大將軍尚書令に至る

鄧芝 字の伯苗義陽新野の人官車騎將軍に至る

張翼 字の伯恭武陽の人官左車騎將軍に至る

宗預 字の德璉南陽安衆の人官征西大將軍に至る

呂凱 字の季平永昌の人官雲南の太守に至る

糜化 字の元倫襄陽の人官右車騎將軍に至る

楊戲 字の文然武陽の人官射聲校尉に至る

○別傳

劉焉 字の君郎江夏竟陵の人官大將軍に至る

劉泌 長沙の人樊城縣の令則ち劉封之叔父也

○附傳

諸葛喬 諸葛騰 諸葛倫 董厥 張松 馬超 陳禔 周

倉 馬岱 尚龍 蔣斌 傅會 劉敏 蔣顯 衛繼 關平

張苞 關興 常播 孟達 關索 趙威 吳懿 射受 顏

恭 劉豹 向舉 殷純 趙祚 何宗 張爽 吳班 王湛

陳習 陳幾 張南 傅彤 趙景 馮習 黃皓 何平 黃

崇 閻宇

吳

○帝 武烈皇帝 姓の孫名の堅字の文遠吳郡富春の人前破虜將

軍後の帝と諡す

長沙桓王 諱の策字の伯符堅之長子前討逆將軍後の帝と

諡す

太皇帝 諱の權字の仲謀策之弟在位三十一年壽の七十歳

會稽王 諱の亮字の子明權之少子在位六年壽の十七歳

景帝 諱の休字の子烈權之第六子在位七年壽の廿歳

烏程侯 諱の皓字の元宗權之孫在位十七年壽四十一歳

○后

吳后 吳郡の人權之母

徐后 吳郡富春の人權之妻

步后 臨淮淮陰の人亮之母

王后 瑯琊の人和之母

潘后 會稽句章の人權之妻

全后 全尚之女亮之妻

朱后 朱據之女休之妻

滕后 太常胤之族姑之妻

何姬 丹陽句容の人和之妻

○宗室

孫靜 字の幼臺堅之弟官昭義中郎將に至る

孫瑜 字の仲異靜之子官奮威將軍に至る

孫皎 字の叔朝瑜之弟官征虜將軍に至る

孫奂 字の季明皎之子官揚威將軍に至る

孫資 字の伯陽堅之姪官征虜將軍に至る

孫輔 字の伯備資之弟官平南將軍に至る

孫翊 字の叔弼權之弟官丹陽の太守に至る

孫匡 字の季佐翊之弟官定威中郎將に至る

孫韶 字の公禮策姪を賜ふ官鎮北將軍に至る

孫登 字の子高權之長子官黃龍二年立て太守ある州而卒

孫慮 字の子智登之弟建昌侯を封す

孫和 字の子孝慮之弟赤烏五年の太守とある太和年陽

侯とある

孫桓 字の武叔和之子官建武將軍丹徒侯に至る

孫奮 字の子威和之弟魯王を封す

孫奮 字の子揚霸之弟齊王を封す

孫峻 字の子遠靜之曾孫官丞相大將軍に至る

孫琳 字の子通峻之外弟官大將軍承事侯に至る

○列傳

劉繇 字の正禮東萊弁平の人官振武將軍に至る

太史慈 字の子義東萊黃縣の人官建昌都尉に至る

士燮 字の威彦蒼梧廣信の人官衛將軍龍編侯に至る

張昭 字の子布彭城の人官輔吳將軍に至る

顧雍 字の元歎吳郡吳の人官尚書令陽遂鄉侯に至る

諸葛瑾 字の子瑜瑯琊の人官左將軍宛侯に至る

步騭 字の子山臨淮上陸の人官右將軍臨湘侯に至る

張紘 字の子綱廣陵の人官長史に至る

嚴畝 字の曼才彭城の人官尚書に至る

程秉 字の德樞汝南之類の人官太傅に至る

關澤 字の德潤會稽山陰の人官少傅に至る

薛綜 字の敬文沛郡竹邑の人官太子の少傅に至る

周瑜 字の公瑾廬江舒の人官偏將軍領南郡太守に至る

魯肅 字の子敬臨淮東城の人官橫江將軍益州牧に至る

呂蒙 字の子明汝南富陂の人官南郡の太守孱陵侯に至る

程普 字の德謀右北平土垠の人官還冠將軍に至る

黃蓋 字の公覆豫章滎陽の人官偏將軍に至る

韓當 字の公義遼西合支の人官昭武將軍に至る

蔣欽 字の公奕九江春春の人官昭武將軍に至る

周泰 字の幼平九江下蔡の人官奮威將軍に至る

陳武 字の子烈廬江松滋の人官偏將軍に至る

董襲 字の元代餘姚の人官偏將軍に至る

甘寧 字の興霸巴郡臨江の人官折衝將軍に至る

凌統 字の公績瑯琊の人官偏將軍に至る

徐盛 字の公檣瑯琊の人官安東の太守に至る

瑤璋 字の文珪東郡發干の人官振威將軍に至る

丁奉 字の承淵廬江安豐の人官右司馬左將軍に至る

朱治 字の君理丹陽故鄣の人官安國將軍毘陵侯に至る

朱然 字の義封朱治之姊之子官右司馬右軍師に至る

呂範 字の子衡汝南細陽の人官太司馬に至る

朱桓 字の休復吳郡吳の人官前將軍に至る

虞翻 字の仲翔會稽餘姚の人官騎都尉に至る

陸績 字の公紀吳郡吳の人官偏將軍に至る

張温 字の惠恕吳郡吳の人官太子の太傅に至る

路統 字の公緒會稽烏程の人官建安の都尉に至る

陸遜 字の子建陸遜之弟官建興將軍に至る

孫乾 字の孔休烏程の人官太子の太傅に至る

朱據 字の子範吳郡吳の人官驍騎將軍に至る

陸遜 字の伯言吳郡吳の人官丞相に至る

陸抗 字の幼節瑯琊外縣官偏將軍毘陵侯に至る

賀齊 字の公苗山陰の人官後將軍に至る

全琮 字の子橫錢塘の人官右衛大司馬左將軍に至る

吳固 字の定公廣陵海陵の人官大司馬に至る

周訪 字の子魚陽梁の人官裨將軍關内侯に至る

趙雲 字の子幹山陰の人官前將軍に至る

潘璋 字の承明武陵漢壽の人官太常卿に至る

陸凱 字の敬風吳郡吳の人官征西大將軍に至る

吳范 字の文則會稽上虞の人官騎都尉太史令に至る

是儀 字の子羽北海の人官尚書僕射に至る

趙雲 字無河南の人官大中丞に至る

劉惔 字の子仁平原の人官太史令に至る

糜竺 字の子嗣北海劇の人官左衛將軍に至る

胡綜 字の偉則汝南固始の人官偏將軍に至る

王蕃 字の永元廬江の人官散騎常侍に至る

樓玄 字の承先清國新の人官太司馬に至る

諸葛恪 字の元遜瑯琊之長子官太子太傅に至る

潘陽興 字の子元陳留の人官丞相に至る

賀邵 字の興伯會稽山陰の人官中書令太子太傅に至る

華歆 字の永先吳郡武進の人官中書丞に至る

韋曜 字の弘嗣吳郡雲陽の人官中書僕射に至る

○附傳

劉基 士徽 士望 吳景 徐異 徐嗣 徐現 張承 張

林 張奮 顧邵 顧暉 顧承 步騭 張玄 張倫 裴玄

唐國 薛勳 薛營 陳表 朱續 朱變 呂續 虞紀 虞

仲 虞登 虞芮 陸宏 陸容 徐詳 劉淑 諸葛騰 諸葛

○書

武帝 姓曹諱曰操字孟德沛國譙の人壽六十六歲
 文帝 諱曰丕字子桓操之子在位七年壽四十四歲
 明帝 諱曰叡字元仲丕之子在位十二年壽三十六歲
 齊王 諱曰芳字阿瞞操之養子在位十四年壽四十三歲
 廢王 廢

高貴鄉公諱曰髦字季直丕之孫東海定王霖之子在位七年
 陳留王諱曰奭字元孫明帝之孫燕王宇之子在位九年壽五

五十八歲位を晉み禪る

○后
 武宣太后 丕之母瑯琊陽縣の人
 文昭皇后 叡之母中山無極の人
 文德皇后 叡之繼母安平廣宗の人
 明悼毛皇后 叡之妻河内の人
 明元郭皇后 叡之次妻西平の人
 ○武帝の二十四男

曹休 字の支烈操が族弟
 曹真 字の子丹操が族子
 夏侯尚 字の伯仁淵が從子
 曹彰 字の子文操が次子任城威王の封す
 曹植 字の子建操が次子陳思王の封す
 曹熊 字の子威操が次子蕭王の封す
 荀彧 字の文若穎川潁陰の人官侍中光祿大夫お至る
 荀攸 字の公達颍之姪官侍中令お至る
 賈詡 字の文和武威姑臧の人官大尉侍中令お至る
 袁煥 字の曜卿陳郡扶樂の人官郎中令お至る
 張範 字の公儀河内修武の人官諫議大夫お至る
 涼茂 字の伯方山陽昌邑の人官太子太傅お至る
 國淵 字の子尼樂安蓋の人官大僕卿お至る
 田疇 字の子泰右北平無終の人官議郎お至る
 王修 字の叔治北海營陵の人官大司農郎中お至る
 管寧 字の子幼安北海朱虛の人官光祿勳お至る

太后 生 丕彰熊植
 劉氏 生 昂樂
 張氏 生 冲操宇
 杜氏 生 林森
 蔡氏 生 珠嬪
 周氏 生 均
 宋氏 生 繼
 甄氏 生 慮 李氏 生 鸞 潘氏 生 薤 朱氏 生 璽 仇氏 生 綽 徐氏 生 禮 蘇氏 生 遂 張氏 生 賈 宋氏 生 保

○文帝の九男

○列傳
 夏侯惇 字の元讓沛國譙の官大將軍お至る忠武給す
 夏侯淵 字の妙才惇族弟官征西將軍お至る忠侯給す
 曹仁 字の子孝操大司馬お拜忠侯と給す
 曹洪 字の子襲操從弟

郗原 字の根矩北海朱虛の人官五營將長史お至る
 崔琰 字の子季珪清河東武城の人官中尉お至る
 毛玠 字の子孝先陳留半丘の人官尚書僕射お至る
 徐奕 字の子季才東莞の人官中尉お至る
 何夔 字の子叔龍陳郡陽夏の人官大僕成陽亭侯お至る
 鮑照 字の子叔業泰山平陽の人官御史中丞お至る
 邢顛 字の子昂河間鄭の人官司隸校尉關内侯お至る
 鍾繇 字の子元常潁州長社の人官太傅定陵侯お至る
 華歆 字の子魚平原高堂の人官太尉博平侯お至る
 程昱 字の子仲德東郡阿の人官衛尉安鄉侯お至る
 王朗 字の子景興東海郟の人官大司徒關陵侯お至る
 郭嘉 字の子奉孝潁州陽翟の人官司空軍祭酒お至る
 董昭 字の子公仁濟陰定陶の人官衛尉樂平侯お至る
 蔣濟 字の子子通楚國平阿の人官領軍將軍お至る
 劉曄 字の子子陽淮南成德の人官大中大夫お至る
 劉放 字の子子乘涿郡の人官侍中光祿大夫方城侯お至る

劉毅 字の元穎沛國相の人官揚州の刺史お至る
 梁習 字の子虞陳郡柘の人官大司農お至る
 張既 字の德容馮翊高陵の人官西鄉侯お至る
 温恢 字の曼基太原祁の人官涼州の刺史お至る
 賈逵 字の梁道東阿襄陵の人官建威將軍お至る
 任峻 字の伯達河南中牟の人官長水校尉お至る
 杜畿 字の伯侯京兆の人官尚書僕射兼樂亭侯お至る
 蘇則 字の文師扶風武功の人官都亭侯お至る
 鄧渾 字の文公河南開封の人官將作大匠お至る
 倉慈 字の孝仁淮南の人官熒煌の太守お至る
 張遼 字の文遠廬門馬邑の人官前將軍晉陽侯お至る
 樂進 字の文謙陽平衛國の人官右將軍お至る
 于禁 字の文則泰山鉅平の人官安遠將軍お至る
 張郃 字の雋父河間鄭の人官征西車騎將軍お至る
 徐晃 字の公明河東陽の人官右將軍陽平侯お至る
 李典 字の曼成山陽鉅野の人官破虜將軍お至る

李通 字の文達江夏平春の人官汝南の太守お至る
 臧霸 字の宜高泰山華州の人官執金吾屬城侯お至る
 文聘 字の仲業南陽宛の人官後軍將軍新野侯お至る
 呂蒙 字の子恪伍城の人官萬年亭侯お至る
 許褚 字の仲康譙の人官武衛中郎將牟鄉侯お至る
 典韋 字の季常陳留巴丘の人官都尉お至る
 龐德 字の令明南安桓道の人官立義將軍關内亭侯お至る
 龐清 字の子爽酒泉表氏の人官中散大夫お至る
 關溫 字の伯倫天水西城の人官上邽の令お至る
 王粲 字の仲宣山陽高平の人官侍中お至る
 荀彧 字の伯儒河東安邑の人官尚書閣祭侯お至る
 劉廙 字の恭嗣南陽の人官侍中關内侯お至る
 傅叡 字の闕石北地泥陽の人官尚書僕射陽鄉侯お至る
 陳群 字の長文潁州許昌の人官司空お至る
 桓楷 字の伯緒長沙臨湘の人官侍中尚書僕射侯お至る
 陳矯 字の季弼廣陵東陽の人官司徒お至る

徐宣 字の寶賢廣陵海西の人官侍中光祿大夫お至る
 衛臻 字の公振陳留襄邑の人官司徒長垣侯お至る
 盧毓 字の子家涿郡の人官司空容城侯お至る
 和洽 字の陽士汝南西平の人官太常卿お至る
 常林 字の伯槐河内温の人官光祿大夫お至る
 楊俊 字の季才河内獲加の人官南陽の太守お至る
 杜襲 字の子緒潁川定陵の人官太中大夫お至る
 趙儼 字の伯然潁州陽翟の人官司空お至る
 裴潛 字の文行河東聞喜の人官光祿大夫お至る
 韓暨 字の公至兩陽堵陽の人官司徒お至る
 崔林 字の德備清河東武城の人官司空安陽侯お至る
 高柔 字の文忠陳留圉の人官太尉お至る
 孫資 字の德達涿郡容城の人官司空大利率侯お至る
 王昶 字の偉臺東郡廣丘の人官司空陽鄉侯お至る
 辛毗 字の佐治潁州陽翟の人官衛尉お至る
 楊阜 字の義山天水冀の人官少府卿お至る

高堂隆 字の昇公泰山平陽の人官散騎常侍お至る
 滿寵 字の伯章山陽昌邑の人官大尉お至る
 田豫 字の國讓潁陽雍奴の人官大中大夫お至る
 奉招 字の子經安平關津の人官鷹門の太守お至る
 郭淮 字の伯濟太原陽曲の人官車騎將軍陽侯お至る
 徐逸 字の景山燕國薊の人官司空お至る
 胡質 字の文德楚國壽春の人官征東將軍お至る
 王基 字の伯興東萊曲城の人官征南將軍お至る
 王昶 字の文舒太原晉陽の人官征南將軍お至る
 王凌 字の彦雲太原祁の人官司空お至る
 毋丘儉 字の仲恭河東聞喜の人官鎮東都督お至る
 諸葛誕 字の公休瑯琊の人官司空お至る
 司馬芝 字の子華河内温の人官河南尹お至る
 司馬朗 字の伯達河内温の人官袁州の刺史お至る
 鄧艾 字の士載義陽棘陽の人官太尉お至る
 鍾會 字の士季潁州長社の人官司徒お至る

華陀 字の元化沛國譙の人醫を善す

杜襲 字の公良河南の人官軍謀祭酒參太樂事に至る

朱建平字の沛國の人官五官將に至る相を善す

周宣 字の仲和樂安の人官中郎屬太史に至る書畫圖を

管轄 字の公明平原の人官少府丞に至る卜を善す

○附傳

韓浩 史丹 曹純 曹華 公孫淵 曹爽 曹芳 曹真 曹芳

曹芳 河晏 鄧威 丁儀 鄧軌 李勝 桓範 胡昭 孔

融 稱衡 王肅 劉資 陳琳 楊修 李浮 龔圭 夏侯

玄 唐咨 文欽 文書 鄧忠 夏侯楙 徐庶 蔡瑁 張

允 師纂 夏侯恩 張繡 蔣幹 陳珪 陳登 夏侯淵

韓德 程武 許儀 裴秀 樂綝 王雙 秦良 車胄 郝

昭 司馬懿 張虎

○雜傳

黃卓 字の仲諷隴西臨洮の人官大將軍を拜す

袁紹 字の本初汝南汝陽の人官大將軍に至る

劉表 字の景升山陽高平の人官鎮南將軍荊州の牧成武
侯に至る
呂布 字の奉先五原郡九原の人官奮威將軍に至る封温侯
張遼 字の孟卓東平壽張の人官陳留の太守に至る
公孫瓚 字の伯圭遼西定支の人官前將軍易侯に至る
陶謙 字の恭祖丹陽の人官安東將軍徐州の牧に至る
張魯 字の公基沛國豐の人官鎮南將軍閬中侯に至る
劉璋 字の季玉武陽の人官振威將軍益州の牧に至る
張繡 字の孟高官廣陵の太守に至る
王匡 字の公節官河内郡の太守に至る
司馬懿 字の仲達河内温の人官宣帝と諡す
司馬懿 字の子元懿 長子景帝と諡す
司馬懿 字の子尚懿 次の子文帝と諡す
司馬懿 字の 愛世昭 長子魏主と受て正位を即晉と号す
位二十六年壽五十五歲武帝と諡す
趙氏止

國問

或人問て曰く。漢の高祖の張良。蕭何。韓信が三傑を用ひて。四百年の基を開たまへり。昭烈皇帝の孔明。關羽。張飛を
得たまへる。世の人これを蜀の三傑と號す。まうまうとも海宇を混一せんとむたりせして。まづり。劉璋よりたつて。

滅びたる。昭烈の徳教高祖よりよばざるもあり。三傑の才力。張良。蕭何。韓信よりよばざるもあり。子若て曰く。漢
室とて。衰へて。奸雄さそひ起り。曹操孫權が徒ら。位を借し。威を震て。天下みま漢あるとをまらせ。昭烈皇帝の漢室

の皇叔。涿郡より義兵を揚。姦黨を誅して。王業を蜀都に開き。炎熾をわひて。漢運のまよふ傾うんとするを扶け。再
び社稷を興して。漢の統を繼たまふ。その功いさつて大あり。わは高祖の時を得。運も乘て興さる。同うらんや。こそ

所謂易し地則ち皆然るものあり安んぞ優劣を論せる事をせん
問て曰く。荊州の劉表。益州の劉璋とも。漢室の宗親。卒に帝命を背せ。まうる。昭烈二國を奪て。劉璋を外に移す。

こそ正さを得たりといはんや。若て曰く。取之。以仁義守之。以仁義守之。武王あり。天下こそを非なりとせせ
董卓が乱より。豪雄さをひ起て。一州を保ち。一郡を領するもの。轉をうり。いふて。王室を奪んと計。荊州の劉表。益州の

劉璋。儼然として。不臣の心をさし。とさみ。險阻を恃んで。兵威を恐。常は神雷を竊んと計る。こそまう。漢の奸賊なり。
董卓衰微が輩らと。又あんど異あらん。昭烈信義。は。仗て。群盜をこらひ。漢室と恢復せんことをやつして。もしこの二國

を匡せん。安んぞよく王室を興さん。こそまう。所以爲仁義なり。況や劉表が讓を辞して。身の難難。あふんとを
顧みせ。劉琦を扶けて。嫡庶を正し。曹操を赤壁に破て。卒に荊州を保ちたまへり。劉璋が暗弱なる張魯。法正が輩

ら。賢主を得ん事を。おもひ。久く昭烈と主とせんことをやつと。まうまうとも。同宗の國を故きくして。奪よまのひせ。堅く

るよ長じて。討つことを用るよ長せざるなり。答て曰く。みぢ非なり。曹操すて死して天下又孔明を敵するものなし。天よし漢を昌よせんともあらず。孔明何より出たりとも。曹操と擒よし仲達を敵するよ足ん。魏延が討つことあり。危し。もし子午谷より出て使侍を勝とて得とも。魏の勢谷の口を塞ぎあは。五千余騎ことごとく谷の中を餓死せし。こを敵を欺くの計とあり。このもあは孔明用ひず。孔明の節制の師を用ゆ。さんぞ使侍をもつて勝とて望さん。こをせざるよ明道正義の人と論せし。近功小利を急する人のまる所よわらず。

問て曰く仲達渭水も出て。蜀の勢を拒ぎ。孔明もし武功も出山も依て東の方陣を取れば味方の大いなる患ひなり。もし西の方五丈原も陣を取れば味方すこしも患るとなしといへり。まづるよ孔明果して五丈原も陣を取たるは武功も出るとをせざるもあり。答て曰く。こをみな仲達が詐りの計とあり。仲達深く孔明を怕き出て。戦ふとさくして。巾幗の辱しめを受。こをよよつて魏の將士も。いうらすといふものなし。かからず孔明が五丈原も出んことを怕き。諸人の心を離くよせんため。詐つてこの言を出せり。およそ兵を用るの道の高を好んで下を惡陽を貴んで陰を賤んせ。孔明が五丈原の陣の。高平廣大にして守るとさなり攻べりらす。攻るとさなり依べりらす。進むとさなり禦ぐべりらす。退くとさなり追べりらす。是所先據不可勝之地以待敵之可勝者也。仲達よく兵法も通す。孔明がうさらす五丈原も出んことをまづつて。この言を出せり問て曰く。關羽。臨沮も亡びて後往くよ神を現す。こをわやしむべきの事あり。おそらくの妄言さふん。答て曰く。關羽の本解良の武夫。昭烈と生死の交りをむすんで。恩骨肉のごとく。險難の中も相從ふて慢易の失るく。一毫も信義を背くすして天下の奸賊を誅し。了よ王業を扶成り。このもあは曹操が奸雄あるも。關羽を屈するともあらず。その義を感じて追とを得せ。こをまこと天下の義士ありと稱せり。すてよ

臨沮も亡とへとも。英雄剛大の氣四海も彌給す。さんぞ神應さふことを得ん。玉泉山も神を談じて昔許長老を師とし。唐の儀鳳年中も。六祖神秀と。雲霧のわひびよ遇て。道場を鎮守し。宋の崇寧年中も。かやく聖とわらして。崇寧真君も封せらる。解州鹽池も蚩尤神の邪まを成るを破つて。まきりよ義勇武安王も封せらる。それより帝も封せられ天尊と稱せらる國を護し。民を祐けて佛夷の國までも仰尊すといふとあはく。世も傳る也。日本の軍神と稱するも。將軍塚も埋し像も。みか關羽ありと。子異域の人よわんで關羽の事を問し。安南。琉球。女直。朝鮮。呂宋。暹羅の諸國も。ことごとく廟宇を建て祭をさし。およそ事新らずといふとあはく。關羽と號して乘所の舟みか像と設く。近來その廟の記を見るよ曰く

余往年起三燕都。自遼東至帝京。數千里名城大邑。及閭閻衆盛。處無不立廟宇。以祀中漢將。將亭侯關公。至於人家。亦私設香案。掛壁畫。香火於其前。飲食必祭。凡有事必祈。請官。官員新赴任者。齋宿請廟。甚肅虔。余怪之。問於人。不獨北方爲然。在在如此。遍天下云。萬曆壬辰。我國爲倭賊所侵。國幾亡。天朝發兵救之。連六七載。未已。丁酉冬。天將合諸營兵。進攻蔚山賊壘。不利。戊戌正月初四日。退師。有遊擊將軍陳寅力。戰中賊九載。還漢都。一廟病。題於所寓崇禎門外。山麓。創起廟堂一座。中設神像。以奉關王諸將。楊經理以下各出銀兩。助其費。我國亦助之。廟成。上亦往觀之。余與備邊司諸僚。隨駕諸廟庭。一再拜。其像。塑土爲之。面赤如重棗。鳳目。鬚垂。過腹。左右塑二人。持大劍。侍立。關之關平。周倉。儼然如生。自是諸將每出入。參拜。皆曰。爲東國求神助。却賊。五月十三日。大祭。

廟中云是關王生日若有雷風之異則神至矣是日天氣清明午後黑雲四起大風自西北來雷雨並作有頃而止衆人皆喜曰王神下臨矣既而又於嶺南安東星州二邑建廟安東則劉石爲像星州土塑而星州甚著靈異之跡云未幾倭酋關白平秀吉死倭諸屯悉皆撤去此亦理之難測者也豈偶然耶昔符堅入寇晉謝安以旌節旗鼓禱於蔣子文廟謝玄以八万偏師一勝強秦六十方如八公山草木風聲鶴唳說者皆以爲神助况關王以英雄剛大之氣其扶正討賊之志貫萬古如一日死而不滅安知無神應乎嗚呼烈哉京師廟前立二長竿懸兩旗一書二條天大帝一書三威震華夷字大如椽因風飄拂半空遠近皆仰而見之其帝號亦皇朝所追崇云可見其尊崇之至也

此をともつて見るとその神を現すと云ふんぞ怪むことをせん

同て曰く張飛強暴にして。むかしく匹夫の手は死す。こを血氣の勇あり。あんど人傑と稱するも足ん。若て曰く張飛稟性躁暴ありといへども。桃園は生死を誓て。義氣の盛ると關羽は亞す。蜀に入て嚴顔を釋し。來陽は風塵をす。いめ人の賢あるを見て。敵ふと師父のごとし。異は國士の風あり。あは血氣の勇あらんや昭烈。腹を版より身を起して。卒は漢の正統を繼たまん。孔明が智。關羽張飛が勇。因り。世の人こを。高祖の三傑は稱する。異は宜ある哉

繪本通俗三國志初編卷之二

祭天地桃園結義

蕭々邦家の興廢を見るも。古へより今に至るまで。治極るとき。則ち乱入。乱極るとき。則ち治入る。その理陰陽の消長。寒暑の往來するごとし。このもあ。人君心を小ると。就て業として。きんらくもあへて。こを忘る。堯舜もあは病とす。況や庸人をや。漢の高祖。三尺の劍をひつさげて。秦の乱と平げたまひしより。哀帝の御宇まで。三百余年。天下よく治りし。王莽安ん位を尊て。海内又大に乱る。まうるを光武を平げて。後漢の世を興したまひ。賢帝。桓帝の御時まで。そで。二百年よあへり。光武帝より十二代の天子を。靈帝とやうてまつる。桓帝の讓を受けて。御年十二歳まで。帝位は即たまふ。このとき大將軍董卓。太傅陳蕃。司徒胡廣。三人。相共天下の政務をつらとりて。君を輔佐し奉つる。そのうち内官は曹節。王甫といふものあり。詔候として君を欺き。復は權柄をもつばくませし。曹節。陳蕃を誅せんとして。計ごとめれきこえて。反てその身を害せらる。こをより内官。いよ志として得て。はし。又朝綱を手握り。建寧二年四月十五日。帝温徳殿に。出御ありて。そで。御座は着んと仕。まふとき。俄く。殿角より狂風おこりて。その長二十余丈の青蛇。梁りの上より。び下りて。椅子の上は。蟻まうりければ。帝大におどろかせたまひ。地の上は。昏倒し。まふ。殿中の騒動を。めならせ。百官皆上を下へ。反して。武士をめて。こを擁出せんとする。大蛇は。消ぐごとく。失て。雷の鳴と。天地を碎ぐごとし。雷まじりの大雨。夜半。いよつて。降り。洛陽城中の民家。數千軒。壊れて。死するもの多うりけり。こを。希代の珍事。うあ。あやしむ。同じ。四年の二月。洛陽。あび。しく。地震して。禁門省垣。ごとく。倒。海水。あふれ。まて。登萊。沂密。

の海ちうき國の。人家みき大波よまうれて。百姓死するもの數を知らず。是徒事よわらすとて。改元ありて喜平と号せし。こきより近境時と謀反するものあり。喜平五年又わらうめて光和と号せし。諸處に怪異の事ありて。唯難化して雄とある六月朔日十餘丈の黒氣地より起て。飛で温徳殿入。秋七月玉堂の内は虹わらひれて。五原山の崩ことごとく崩る。そのはうさまぐの怪しき事ども。數を知らざりけり。こき賊一人の懐み。天下の大事あらんとて。勅して群臣を金商門に集め。災ひを除の術を問ふと云ふ。光祿大夫楊賜。議郎蔡邕。二人表を上げつりてやける。近年打積怪異の事ども起りし。みきこれ亡國の兆あり。天は漢朝を去て。變を示して君臣を戒めんとす。古へより天子怪を見れば。そのうち徳を修といへり。いま内官狼狽を執て。天下の禍ひを成と。早是を除くまひ。天災自うら消せしと。ひそくは奏聞せければ。其事乍ちもれて楊賜。蔡邕等。内官の爲。殺ささんとせしを。呂強といふもの蔡邕才を惜み。命を乞て助けり。其後内官は張讓。趙忠。封諱。段珪。曹節。侯覽。蹇碩。程璜。夏暉。郭舉。といふもの十人。みき君を詔ひ事て。専ら天下の政ごとを掌とる。このもあは是を十常侍と号して。朝廷敬ひ重むると師父のごとし。諸々の官人其門下は伺候し。阿り服せんとをほつと。こき中平元年甲子の歲鉅鹿郡に張角と云者あり二人の弟を張梁。張寶といふあり元來不第の秀才なりける。或日山中入て藥を採一人の翁み逢。この翁眼のうち碧みして顔の童子のごとく。手は藜の杖を携へ。張角を呼で怪し洞のうちみ到り。三卷の書を授てやしける。是を太平要術と名づく。故よく此書を讀で。只つねに道を行ふて善を施し。天に代りて普く世の人を救んとを思へ。若惡心起しすと必死身を亡はすと云ければ。張角再拜して其名を問ふ。我は南華老仙なりと答て。一風の風ふさかこり行がらしら飛去りけり。張角此書を讀で晝夜こころを學び。遂に雨をよび風をよぶの術を得



て。自ら太平道人と号せし。其頃天下大は流行病のれて死する者多かりければ。張角あまねく符水をはどこそに馳しを得せといふ者あく。咸く張角が座前み來りて。自ら其遇を讒悔し。みな立どころは平復と。張角これより大賢良師と号し。五百余人の弟子を四方に分ちて病を救しめ。三十六の方を立て大小を分ち。皆將軍の名を以て方名づく。此もあは大方を行ふもの一万余人。小方を行ふもの六七千人。みき一部の長を立て。蒼天已死。黃夫當立。歲在三甲子。天下大吉といひはやらせ。甲子の二字を書てあまねく施し興へ。郡縣市鎮宮觀寺院ことごとくこれ推せといふとなし。その後青州幽州冀州兗州荊州揚州袁州豫州の間より。家々大賢良師張角と書て。敬ひ貴ぶ事鬼神を禮するが如くありければ。張角心の内は非分の望を發し。先大方の馬元義といふ者も。金銀を持せ。禁裏に入りて。密り十常侍が心を結せしめ。封諱。徐奉等も。内通のたとを頼み。二人の弟。張梁。張寶を呼でやける。至

て得たり。民の必なり。今民の必なり。若此とさよ乘て天下を取らん。万民の望を失はん。願くは二人の本意を聞ん張梁張寶を元より望むところありといひけり。張角大ひ喜び。一やうは黄巾の旗を造り。三月五日。一同に事と起さんとて。唐州といふ弟子を書籍を持せ。禁裏に入て内々頼みあさる。封爵。徐奉等も告をらさしむる。唐州より心をも變じ。直ち奉行所を行て。事の仔細を訴たへけり。帝大いおどろき。大將軍何進も命じて。まづ馬元機を生取て。首を刎させ。内應せんと仕るものども。千余人を獄下し。張角の事のあらむを。見えて。そみやう兵を起し。自り天公將軍と号し。張梁を地公將軍と号し。張寶を人公將軍と号し。百姓をわづめてやける。今漢の運氣す。大聖人世も出たり。休等宜く天を順ふて。太平を樂めと云けり。四方の愚民も。と來り集り。みち資する絹と以てその頭をつ。みけり。世の人こを黄巾の賊と号す。張角とて四五十万の勢を得て。在る所も火を放ち。人の財寶をうとめ取。こをよりて地頭官走も防ぐべさやうなく。とく逃りてその騒動も。大將軍何進。こを誅せんとして。帝も奏し。諸所の守護職も命じて。軍勢を催促せしめ。盧植。皇甫嵩朱雋。三人を大將とし。三手も遣討せしむ。是とさ張角が一軍。幽州燕州の界を手痛く犯しけり。大守劉焉。こを防かん爲す。校尉鄭玄といふものも命じ。諸所も高榜を立て。忠義の兵をわづめしむ。そのころ涿縣の樓桑村といふ所。一人の英雄あり。是人つねも言そくあふして。禮を以て人より下り。喜怒色もあらはさず。天下の名ある人を友として。その志もさしきわめて大あり。身の長七尺五寸。兩の耳肩もたき。左右の手膝とさき。よく目を以てその耳をへりみる。漢の中山靖王劉勝の後胤として。景帝の玄孫あり。劉備。字は玄德。父を劉弘といひし。幼くして喪をひし。母も事て學をつくし。自ら履を賣。磨を織て家業と

す。舎の東南の方は大なる桑の木あり。高五丈余として。とるうも望め。重として車蓋のごとし。往來の人此木を見て。尋常もあらずといふ。李定といふ人を見。此舎よりうさす貴人を出さんといへり。とさ二年二十八歳ありける。天下は黄巾の賊蜂起して。國より忠義の士をまねくと聞て。自ら出て州郡も立る高榜を讀。長嘆して飯ふんとする。後より大いある聲をあげて。大丈夫の士。國のさめ力を出さして。何事をも長嘆とるぞと。詞をくるものあり。玄德と後を見。其人身の長八尺。豹頭環眼。燕頰虎鬚。聲雷ちのごとく。勢はひ奔馬も似たり。すあちち立回て其名を問。答て曰く。某は張飛字は翼徳といふものあり。世は涿郡に住居して。そこの田地を持。酒を賣猪を屠て家業とし。専ら名ある人と相交る。今此所をどぐる。足下の高榜の下も長嘆し。ふと見る。こを如何するも。玄德の曰。世は漢の宗族も。劉備字は玄德といふものあり。近なる黄巾の賊。さきり州郡を掠めおびやうす。我これを平けて社稷を扶けんと思へども。力の足ざるを恨る。張飛が曰く。よくも目も心も合。その義を。我に従ふもの四五人あり。とも志をわけて大儀の計畧を成んとて。伴ふて玄德の家も入り。酒を飲で相議する處。又一人の男來り。一輛の車を酒店の門外もとめ。内も入て桑の木の下も坐し。家主をよんで酒を買。玄德その休を見れば。身の長九尺八寸。髯の長一尺八寸。面の重棗のごとく。唇も抹朱のごとし。丹鳳の眼。臥蚕の眉。相貌堂々威風凛々たりし。びりへ入きて名を問。答て曰。是は河東解良のもの。關羽字は雲長。始め壽長といへり。先年郷の豪傑。勢はひよりて我を侮りし。我これを殺して。江湖のわいどお逃れ。流しとると五六年なり。今黄巾の賊蜂起して。國々おの守護。英雄の士を招く。我此も來り。玄德大い喜び。我志をしの程を詳らうと語りければ。關羽天の助ありと喜び。

共張飛が家よききて。義兵を起さんと議し。三人の内は玄徳。年長じたればとて二人再拜して兄みとて張飛がいしく我宅の後なる桃の園。幸ひは花の盛なり。明日白馬を宰て天と祭つり。烏牛を殺して地と祭り。三人生死の交りを結ぶんといふ。玄徳關羽まうるべしと同じ。次の日桃の園は出で。金紙銀錢をつらね。牛馬をころして天地をまつり。共再拜して誓て曰く。今此三人姓氏異なりと云ふとも。結んで兄弟となり。心を合せ力と協せて。漢室を扶け。上り國家を報じ。下り萬民を救ふべし。同年同月同日は生るゝとを望む。願くは同年同月同日は死ん。皇天后土この心を照覽し。若義は背き恩を忘るべ。天人共誅戮すべしとて。祭り了りて玄徳を兄とし。關羽を次とし。張飛をその次とし。共玄徳の母を拜して。其後郷の内にて。腕立する者共をわつめ。桃の園にて酒宴し。三百余人及びければ。明日より旗を舉んと議する。馬一匹もなければ如何せん。案ざる所。誰と申しらす。數十人打つれて。多く馬を引せらる人。此ところへ向ひ來るとす。玄徳の曰く。此天我を助るありとて。共出で此を見れば。中山の大商人。張世平。蘇双といふ者二人あり。毎年北國を行て馬と商なひける。賊徒路を塞いで往來をなやましける。空しく故郷を回るなり。玄徳ひりへ入で酒宴をさし。逆賊を退治して。漢室を助るの由を語りければ。張世平。蘇双其志を感じ。駿馬五十四。金銀五百兩。鉄一千斤を贈る。玄徳是をうけて。良巧は二振の劍を打せ。關羽の重さ八十二斤。青龍の偃月刀を作り。冷艶錫と名く。張飛は一丈八尺の蛇矛を造りて。甲益までも一齋に能りければ。よらむ時を廻さむ。うち立んとて。其勢五百余騎にて。幽州に到る。大守劉焉大いに喜び。其姓名を問ふ。漢室の宗親なりとて。家の系緒を語られければ。劉焉はさぞ敬ひ。相親むと叔姪のごとし。時々黃巾の賊徒。大方程遠志といふ者。五万余騎にて涿郡を犯しければ。大守劉焉乃ち。校尉鄭靖を大將とし。玄徳を先陣として打向つて



取のしむ

○劉玄德破黃巾賊一

玄德五百余騎よて。たゞち大興山の麓に推し寄せけり。賊軍五万余騎よて陣勢を張る。玄德の關羽張飛を左右となへ。反國の逆賊。なんぞ早く降らざると呼べりければ。賊の陣より。副將鄧茂といふ者。馬をとばして打てり。張飛眼を怒らして虎鬚をうらまふ立。丈八の矛を舞して出む。只一合あして鄧茂を馬より突落し。首を取て徐とどろへりけり。賊の大將程遠志。大い怒て斬てり。關羽是を見て。八十二斤の青龍刀を提さげ。馬を躍らせ。出ければ。程遠志。其勢ひは畏れ。退くんとする所を。關羽一刀よ斬て落せ。賊軍大將を討れて皆降人よ出ければ。玄德うち取りたる首を。賊の肢よ鼻させ。功を取て幽州よりへる。太守劉焉よろこんで出む。諸軍を厚く賞する所。青州より早馬來り。太守張景雲を告ると報じければ。大い驚き。鞭文と披見。黃巾の賊徒城を圍んで事そで。よ遠なり。兵を喚して進攻をせよとあり。劉焉乃ち玄德を呼て如何せんと言する。玄德の曰く。某願くは行て教く。劉焉大い喜び。鄒靖は五千余騎を授け。玄德を先手として。青州を救としむ。玄德の一軍そで賊の陣ちりく推よせ。其体を驚ひ見せ。盡く髪をみだして。黃なる綱よて額をつく。八卦の文よ書て燈とし。敵の來を見て。引分てこれを拒ぐ。玄德五百余騎よて入乱れて取へども。賊の目よあまる大勢よて。新しき手を入りへく拒ぎし。玄德ひ屈して。三十里引退す。關羽張飛と相談し。涉方勢弱くして勝事ありとせ。明日奇兵を出して賊をやふらんとて。關羽お千余騎を付て山の左よ伏置。張飛お千余騎を付て。右よ伏置。曹金を鳴すを相圖と約し。次の日鄒靖玄德一。手よ成りて推し寄せければ。賊の大勢。關のわくが加くよきとひ驚り。賊のこゑ大い驚。玄德しむらく戦ふ体よて。

昨りて。退きければ。賊軍急よ追きたる。そで山の邊よりつら。玄德の勢一度よ金を鳴しければ。左よ關羽右よ張飛。二手よ分れて討て出。三方より取悉り。賊軍大い破て。四角八方よ逃りければ。玄德いきはひよ乗て。青州の城下よ殺到す。城中より是を見て。太守張景雲。門をひらいて打て出ければ。賊軍前後よ度を失き。右往左往よ落失て。青州の圍みたちちち解けり。太守大い喜び。重く諸軍を賞しければ。鄒靖軍を収て幽州よ回らんとて。時よ玄德にされける。ちり頃中郎將盧植。勅命をうけて賊の首將張角と。廣宗よて戦ふときけり。我昔し公孫瓚と共。盧植を師とせり。今行て力を合せ。共賊を平ぐべし。鄒靖が曰く。某いまだ主の命を受ざれば。輕くしむ。事よ叶まじ。足下若行まじ。兵糧の心のまよし。幽州の勢。某ことごとく収めりへらん。玄德こきよよつて。手勢五百余騎を引て。廣宗よ到り。盧植よ見えて右の趣きを語りければ。盧植大い喜び。重く賞して手下よ留む。此時賊の首將十五万の勢よて。廣宗よ屯し。官軍五万の兵と日久しく攻戦ひ。未嘗々しき勝負もありければ。盧植即ち玄德よ向て曰く。此所の賊軍。みち要害よ引てもりたを。急よ勝負のあるべうらす。今賊の弟。張梁張實二人。潁川よ在て。官軍。皇甫嵩。朱儁と相戦ふ。今涉邊よ千余騎の官軍を借てべし。いそぎ是より潁川よ行て戦ひを扶けよまへ。玄德とあはち襟狀を請取。千五百余騎よて潁川よ向る。此時皇甫嵩。朱儁の賊將張梁張實と。挑み戦ふ事數度よ及び。賊の勢打負て長社と云ふ所よ引退す。草木の深き所よ陣を取ければ。皇甫嵩一手の勢よ忍で。敵の後よ廻し。諸軍よ投火把を持せ夜の二更のころ。四方より推よせて一度よ火をうけ。賊をつくりて攻ければ。折ふし風急よして。火焰天を魚し。賊の勢其上を下へとさき立て。馬よ鞍おく暇もあく。人の甲を被よも及むす。十方よ散乱せり。張梁。張實。這よのがれて走りければ。向より一彪の軍馬みな紅の旗を指て打出。眞先よ進む。又

これ一人の英雄の身の長七尺。細眼長髯。鷹鼻人よそぎ。謀ごと業よこへ。常は晉文匡扶の才なきを笑ひ。趙高王莽の縦横の策ごと少なきを嘲けり。兵法ハ吳子孫子ハ劣らざ。沛國譙郡の人ハ。曹操字ハ孟徳。小字を阿瞞と稱し。又吉利ともいへり。乃ち漢の相國曹參より二十四代の後胤として。大鴻臚曹嵩が嫡男あり。官騎都尉に封らる。今冀州の賊を破らんとて。官軍五千余騎にて馳きたり。路と塞いで攻戦ひ。首を取と一万余級馬物の具をうとひ取。皇甫嵩。朱雋も見え。一手も成て逃る敵を追蒐る。玄德ハ此時潁川より來り。賊の破たるを見て。入て皇甫嵩に見え。廣植が驛状を出しければ。皇甫嵩曰く。今賊軍大いに破て走たれば。必は廣宗を行て張角と一手あるべし。邊境早く馳りへり。廣植ハ力を合せて怒るとなり。玄德は因て。又廣宗を引りへす所。向より二三百人の兵士共。罪人を買取て出來る。玄德たきやらんと怪み。近くありてこきを見。乘たる罪人の中郎將盧植あり。大いに驚き。馬より下て。其もを問。盧植涙を流して曰く。我久しく廣宗を在て。張角をとりかこみ。度々戦ひ勝ける。張角わやしき術を成しけるゆゑ。未盡々々破り得ず。近ごろ黃門左豐といふ者。勅使として來り。我ハ賄賂をあたへよと云し。故我軍中より金銀をばしうして。勅使ハ獻まつるべき物ハ。せと答ふ。此よりして左豐より我を恨み。帝ハ驚して。在て我を罪に落し。うくの如く召捕て。董卓を大將として廣宗の賊を退治せしむ。張飛もわへせ大いに怒り。守衛の武士を殺して。盧植を救んとひしめきければ。玄德急止めて曰く。是天子の勅命なり。汝を殺し。關羽が曰く。今盧植官を罷らる。我等不し如涿郡に歸るべし。玄德これに従ひ。兵を引て進む所。忽ち山の邊。賊の聲をこえて。馬烟塵だしく起りしり。關の上より登てこきを望む。廣宗は官軍取ひ負ぬと覺て。黃巾軍の勢天公將軍と書たる旗を先に進め。官軍を追蒐るなりければ。玄德の曰く。是ハ張角が勢あり。官軍を救ひせんをりる

ふまじとて。關羽張飛と馬の鼻をさらへて討て出れば。張角が勢大いに驚き。すこや敵の伏勢の蒐り。後を塞とすとて。我先よと引回しければ。玄德いよくすんで。賊の勢を四角八方へ打ちらし。五十里あまりを追うけたり。董卓ハ廣宗の取ひよまけて。賊軍を追きたる。離共しらす。一手の勢打て出で賊軍をうけらしぬと報じければ。立回りて玄德と對面し。禮了て今如何なる官職ぞと問。玄德官位ある由を答ふれば。董卓甚だろんじて。了と思實をもめへす。張飛大いに怒り。我等血を流して大敵を破り。彼が辛き命を救ひたる。たとへ恩賞こそなくとも何とて芥のごとくよりろんせむ。我この賊を殺さんとて。矛を舞して入んとするを。關羽急引留め。玄德諫てやされける。彼の官高き朝廷の臣。殊に許多の軍馬を領す。我等若こきを殺さば。うからを謀反人と呼とるべし。不し如この所は留るべうらすとて。其夜兵を引具して。朱雋が陣へ趣きける

○安喜縣張飛 檄二督郵

玄德兵を引て。朱雋が陣より加りければ。朱雋大いに喜び。やがて先陣として。賊將張寶が陣へよせける。賊の大將ハ高昇といふ者。馬を出してきつてり。りければ。張飛矛を舞して二三合戦ひ。馬より下り斬ておどす。官軍これハ氣を得て。一度は賊を作て攻入ければ。賊將張寶。馬の上にて髪をささむ。手ハ劍をとりて。口ハ文を唱ける。俄り風雷ち鳴きためき。黑雲の中より人馬夥だしく出來り。勢ハ乘りて討てり。官軍大いにおどろき。散る。散る。しりけき。賊軍勝り乘て掩殺す。玄德敗軍を収め。朱雋と此事を議する。朱雋曰く。これ妖術あり。何を怪む。またん。明日羊猪の血を携へて。兵士を山の頂上より伏置。賊の勢の迫るる時。一度は酒さうけさせ。此法あり。破べし。玄德これに従ふ。五百の勢ハ羊猪の血を持せ。其外多く穀ハしき物を用意し。山の上より伏置て。次の日兵

を進けれバ。賊將張寶。又變をささき文を唱さへける。風雷天地を震動して。沙を飛し石を走らせ。黒雲の中より人馬潮の如く。如く討て出けれバ。玄徳急よ引退く。賊軍こきと追て己山をその路を通る所。一聲の鉄砲ひき。五百の官軍ひとしく出て。彼けられざるものを洒ぎけれバ。忽ち空中より或紙ひて作れる人形草を束たる馬なんと紛として地ふ落。風雷自くら思あける。賊軍法の破たるを見て。退うんとすれバ山の左より關羽一軍を引て討て出。右より張飛が一軍討て出。散る者敷をえらす。張寶の一方と打破り。路を奪て走りけるを。地公將軍と書たる旗を目かけ。矢を近きりける時。玄徳弓を搦て射りけれバ張寶左の臂を射れから。陽城へ逃こもり。堅く守りて出ざりけり此日の合戦。賊の勢三万余人。降る者敷をしらす官軍ついで陽城を圍み。日夜思をもつら攻けれ共。要害堅固にして。未落す一月あまりあ及けれバ。曲陽へ使を馳て。皇甫嵩が賊將張寶と戦ふ。勝負を聞きしむる。使やがて飯り來り。董卓勅命を受けて久しく張寶と戦ひける。官軍毎度不利を失ひけれ。帝又皇甫嵩を命じて董卓代しめ結ぶ。皇甫嵩兵を引て打向ひけれバ。賊の首將張角既死。弟張梁王者の禮を以て是を葬る。皇甫嵩新手を引て速やう攻めり。七度まで戦ひ勝て。つひに張寶を曲陽めて切殺し。張角が墳を掘て其首と洛陽お上せしり。降人あ出る者十五万。討れざる者數をしらす。この功あ依て。皇甫嵩の車騎將軍。益州の牧お封せられ。武騎校尉官操も今度の忠戦より。濟南の相お封せられたりと語けれバ。朱儁を聞て。早く此城を攻落して。人々皆思實預れとして大軍力を台て。切とも射ともへりみず。喚き叫んで攻けれバ。城中とでふ色めさ立てそこや。落んと見えける所。賊の勢も嚴政といふ者。張寶が首を取。城を開て降りり。朱儁こきを平定して。洛陽へ奏聞す。朝廷の百官こきを聞て朱儁。官爵を賜りんとて相議する所。忽ち



南陽より早馬きたり。黃巾の余黨。趙弘。韓忠。孫仲といふ者。三人。十万余騎の溢者を集め。州郡を動乱すと告れバ。群臣帝を奏して曰く。朱儁今陽城を平けて其勢六万。余れり。是を用て討しめさまへとて。即ち詔のりを下しけれバ。朱儁たいち宛城に到る。賊の大將趙弘この由を聞。先韓忠を出してこきと防がしむ。南方の勢みる廣野に出陣を張。玄徳眞先す。み。鼓を鳴し。賊を作りて大い。戦ひ。辰の刻より午の刻まで。勝負の色見えざりけれバ。朱儁自ら精兵をすぐり出して。二千余騎城の東北より宛りける。賊軍後を塞れじと思ひ。急よ引退く所。玄徳大いよとみ夾さんで攻けれバ。賊軍討る。者敷をしらす。皆我先よ宛城へ馳入けれバ。官軍四方を圍んでさびし。水も通せず。城中己兵糧盡て。援の勢あうりけれバ。賊將韓忠人を出して降参せんと願ふ。朱儁大いよ怒つて。急よ城を攻けれバ。玄徳諫て曰く。昔し漢の高祖の天下得さまひし。能降参の人を用ひさまふ故

あり。今賊軍降らんと望む。將軍あんど許し。さしづる。朱雋笑ふて曰く。さうらす此まこと天の時。侯ものこ。昔秦の世みだれて。項羽が如き輩ら。たぐひも争をうて。天下も定まれる君あり。高祖このゆゑも。降る者。如何する警ありてもあつげなまへり。今四海一統の世。黃巾の賊のみ禍ひをなす。若其降参を許さば。何を以て。善をぞいめん。賊徒はしいま。よ悪逆を成て。利を失ふ時。即ち。降参して身を悉くせん。とあらば。是寇を長せるの道。さかん。我此故。根を絶んとす。玄徳其論。服し。又告て。やされける。今この城を四方より密しく圍み。一人も余さ。討んとせば。彼必。一圍。志を合せて。討死すべし。万人心を一つ。して。取。味方も若干亡ぶべし。大敵を。開いて。攻るこそ利。いへ。其逃る時。遅うち。して。勝事を得ん。朱雋尤も。同じ。東南の圍を解て。西北より攻たりし。う。案の如く。城中の軍勢。を先。と。東南の門より逃走る。官軍勢。ひ。乘て。追。散。と。攻。ければ。賊將。韓。忠。既。朱雋。射。殺。さる。活る所。趙。弘。孫。仲。大。勢。を。引。て。馳。來。り。追。手。の。官。軍。を。支。て。火。を。散。して。戰。ふ。朱雋。賊。の。大。勢。を。見。て。少。し。引。退。り。ん。と。し。け。れ。ば。賊。軍。是。も。氣。を。得。て。湖。の。口。を。如。く。み。又。宛。城。を。取。返。す。官。軍。若。干。討。れ。十。里。退。いて。陣。を。取。り。け。れ。ば。其。日。の。暮。が。た。ま。東。の。方。より。一。彪。の。軍。馬。馳。來。る。眞。先。と。い。ひ。廣。額。瀾。面。虎。彪。熊。鷹。吳。郡。富。春。の。人。も。孫。堅。字。の。文。盛。と。て。古。へ。の。孫。子。が。未。業。あり。數。々。バ。邊。功。あり。て。此。時。下。邳。の。函。た。り。し。が。黃。巾。の。蜂。起。を。聞。て。淮。泗。の。精。兵。千。五。百。騎。を。引。て。官。軍。を。力。を。籠。と。朱雋。亦。め。あ。ら。ず。喜。び。便。ち。孫。堅。に。南。門。を。攻。ま。せ。玄。徳。も。北。門。を。攻。ま。せ。て。自。ら。西。門。を。攻。て。態。度。東。一。方。を。圍。ま。す。こ。の。敵。の。心。を。一。も。さ。び。で。心。や。す。く。走。ら。し。め。ん。と。討。し。者。あり。孫。堅。の。此。日。斬。手。され。る。目。を。醒。す。は。ど。の。一。軍。せん。と。て。自。ら。馬。より。飛。ん。で。下。り。や。す。く。と。城。を。こ。え。て。城。中。に。登。り。入。る。是。を。討。ん。と。て。城。中。の。勢。を。ひ。し。く。と。集。り。け。る。と。孫。堅。刀。を。舞。して。目。の。前。の。敵。二十。余。人。を。斬。殺。し。殘。る。勢。を。

八方へ追ちしければ。賊將趙弘大いに怒り。馬を飛して討てり。孫堅是をこどもせ。敵の槩を甲の袖に受て。趙弘が腕を握りすくめ。つひに槩を引奪て。趙弘を刺ころし。その馬に乗て。湖まひたる大勢の中へ。喚てり。左も突右も突。勇を振て。莫たりし。賊將孫仲。背をうねて。北門より逃走る。玄徳急を追うけ。一矢。孫仲を射落しければ。官軍われ先。と。城中へ攻入。首を取。と。數。万。級。南。陽。の。諸。郡。盡。く。平。定。し。け。れ。ば。朱雋。都。も。回。て。車。騎。將。軍。河。南。の。尹。も。封。せ。ら。れ。孫。堅。の。内。縁。あり。て。別。部。司。馬。を。除。せ。ら。る。然。る。も。玄。徳。一。人。の。恩。賞。の。沙。汰。あ。り。し。り。心。懸。く。と。して。た。の。し。ま。せ。或。時。禁。門。の。前。に。て。郎。中。張。均。も。出。合。功。勞。わ。れ。ど。も。恩。賞。さ。さ。し。し。を。語。り。け。れ。ば。張。均。大。い。に。驚。き。急。ぎ。朝。も。出。て。奏。聞。し。て。や。け。る。り。近。年。黃。巾。の。賊。し。き。り。も。起。て。所。を。亂。り。し。本。を。尋。ね。れ。ば。十。常。侍。が。君。を。欺。いて。賄。賂。を。受。り。功。を。さ。し。官。祿。を。與。へ。賄。賂。さ。き。者。の。罪。さ。さ。し。官。を。貶。す。是。故。も。人。民。の。恨。つ。ひ。も。天下。の。亂。と。さ。き。り。早。く。十。常。侍。が。首。を。劊。て。一。は。南。郊。も。梟。双。へ。遍。く。天下。も。告。て。功。ある。者。の。恩。賞。を。賜。ひ。さ。ば。四。海。自。り。ら。平。安。あ。ら。ん。と。彈。る。所。あ。く。や。け。れ。ば。十。常。侍。涉。傍。ら。も。在。て。驚。き。怒。り。張。均。君。と。欺。いて。人。を。誑。す。武。士。も。命。じて。首。を。斬。し。び。べ。し。と。云。け。さ。ば。張。均。氣。を。失。ふ。て。絶。入。其。ま。や。が。て。死。よ。け。り。帝。是。も。涉。必。つ。き。何。さ。ま。黃。巾。の。賊。を。破。て。功。わ。れ。ど。も。恩。賞。を。預。ら。ぬ。者。あ。れ。ば。こ。も。張。均。く。の。諫。つ。き。と。て。功。ある。者。を。涉。尋。わ。り。て。玄。徳。も。中山。府。の。安。喜。縣。と。云。所。の。尉。を。除。せ。ら。る。玄。徳。恩。を。謝。して。即。時。も。關。羽。張。飛。と。二十。余。人。を。從。へ。安。喜。縣。の。官。所。も。行。て。縣。中。の。政。ご。と。を。治。め。ら。る。一。月。を。り。有。て。人。民。み。る。其。徳。も。な。づ。き。今。ま。で。強。盜。惡。逆。の。名。を。取。り。た。る。者。も。己。と。蓋。て。心。を。改。め。良。民。と。成。り。て。服。し。け。り。玄。徳。も。關。羽。張。飛。と。食。する。時。の。卓。を。共。し。寐。る。時。の。床。を。同。う。して。四。月。ば。り。り。も。と。き。ける。所。も。天子。州。郡。も。詔。の。り。を。下。し。此。度。黃。巾。の。賊。を。平。ら。げ。た。る。も。軍。功。あり。と。詐。り。て。内。縁。さ。ん。と。を。頼。み。狼。り。も。官。爵。を。受。け。る。者。多。し。能。

これを正さへしと觸れければ。安喜縣へも督郵來れり。玄徳遠く出迎へて。地の上は禮を成しければ。督郵馬の上より鞭を指揮して回答す。關羽張飛うたふは立。其無禮あるを見て。齒をくいしむるといふ。敢て詞より出す。相隨ふて館中へ到る。督郵少も譲らず。正面へ高坐しければ。玄徳懐んで階下へ侍立す。二時をり有りて督郵問てやける。玄徳の由来如何ある人ぞ。玄徳答て曰く。某の中山靖王の後胤にして。涿郡より黃巾の賊を平げ。三十余度の戦ひをへて此縣の尉を除せらる。督郵大いお叱り汝が如き賤しき者ぞ。昨りて天子の宗族と稱し。功勞もあくて安か官爵を授む。是ゆ因て天子我を勅して。抄汰し正させたまふといひければ。玄徳默然として退る。下吏を呼んで督郵威成て人を畏る。いりある故ぞ。問ふ下吏答て曰く。これ賄賂を取ん爲あり。玄徳の曰く。我民を治めて秋毫も犯さず。何んぞ彼を賄賂ふ錢をらんやとて。了み賄賂を興へざりし。次の日督郵其賄賂を怒り。下吏を召て。玄徳狼り民を害すと訴狀を書せて請取けり。玄徳自ら館門へ到り。内へ入とすれば。番の者共許せしめて。徒ら退らりへり。心の内安ら。折ふし張飛の酒を飲で。只一人馬打のり。館門の前を過ぎける。年老る百姓共。五六十八人泣居りければ。いりある故ぞ。問ふ。答て曰く。督郵さいさひを取ん爲あり。縣吏を召て訴狀を書せ天子を奏して罪をなす。玄徳を害せん。我等こゝに來り其事を告て。玄徳の恩徳を蒙さん。すれば。門より内へ入事ある。却てなん。ふうち出されり。張飛是を聞て大いお怒り。牙をうんで馬よりとびをり。直ち館門へ走入り。番の者共是を入とて。盡く築りける。張飛四方へ追ら。堂中へ入て見れば。督郵高坐して。縣吏を責。張飛雷の如き聲を轟して。民を害する逆賊。此張飛を見知せやと叫び。虎鬚倒す上りて。怒る眼百練の如くありければ。督郵大いおとろ。左右を下知して捕んとする。張飛力足を出して。ちりづく奴原と



安喜縣
張飛督郵
と張飛

踏倒し。飛りへりて。督郵が鬚りを掴んで中へ提げ。憤り己のよくも此所へ來れると云ふ。門外へ曳て出。傍ある柳の木を縛り。自ら柳の下枝を折て。督郵の腿のあたりを。ついで二百打ければ。柳の大枝數十本を打をりけり。玄徳の活事どもまらず。俄りお物さし。成ければ。何事ぞと問ふ。一人走り來りて曰く。張飛酒をそとし人を捕て痛く鞭うつ。今定て打殺してやい。玄徳聞もあへず走り行て是を見れば。張飛が怒り叫聲休す。督郵を柳の梢へ釣わけり。玄徳大いお驚ひて色を失ひ。このそもいりある故ぞと問ふ。張飛大息つひて曰く。是等の賊の民を害する。曲者あり。打殺せん。心ありとて。又大なる枝を振上。さん。打擲す。督郵木の上より立徳を見つ。け。苦げある聲あてやける。玄徳公願く。一命を救ふ。へ。玄徳仁慈の心深ければ。急お張飛を推と。ひる所。關羽の馳來て曰く。兄。そでお莫大の功を立なから。一縣の尉を除せらる。今又督郵を無禮せらる。某思ふお積

練中非驚鳳之所栖。去りす督郵を殺して。故郷より入り。別み遠大の計ごとを成ん。玄德これみ從ひ。印綬を解て督郵が頭よりけ。汝の民を害するの賊。今言を創んせれども。我心み忍ぶる所あり。此の亦み官をぞとて。回るといふて。關羽張飛と伴ふて涿郡へを回られける。其後百姓共集り。督郵を柳の上より下しければ。督郵回て定州の大守を訴ふ。太守此由を朝廷に奏し。兵を指向て玄德を捕んとしければ。玄德事の急なるを見て。一族を率ひて代州を行て劉恢を頼み。暫く此所よりくれてを居れける。

○ 何進謀殺二十常侍

去程ふ。黃巾の賊滅て。天下又靜ありければ。十常侍いよ。君を咫尺して。専ら權柄をとり。共み相謀して。己が心み從ひざる者の科を以て誅殺せ。趙忠張讓二人の。今度の軍功あり依て。恩賞を預りたる人々の方へ。密に人を遣して賄賂を求む。されとも皇甫嵩。朱雋二人の曾て與へざりける也。やがて天子に謀して。彼等が黃巾の賊を平らげて功勞ありとす。更み實なきとみて。天威四方及び。官軍相ざるもあつたり。賊徒自然に滅びたるありと奏しければ。帝これを信じて即時に皇甫嵩。朱雋が官を剝て。趙忠を車騎將軍に封じ。張讓等其外の内官。十三人を同時に列侯に封じ。又司空張溫。大尉を昇り。崔烈司徒に任せられ。皆十常侍に附て。よろづ私しのみ。多して公けある政道よりしり。固權のと共。日お長じて。上下盡々く恨を含み。滎陽の張舉といふ者謀反して。自ら天子と稱し。弟の張純。大將軍と号す。其外長沙江夏の賊徒。諸所を蜂起して。遠近急を告と。雪の飛が如くなれども。十常侍是をりくして。天下太平ありとのみ奏しける。或日帝後園に出て。十常侍と酒宴し。まいければ。陳璜太夫劉陶。豫前ふ来て大いお勸く。帝其故を問ふ。まへに劉陶が曰く。漢の天下やうきと曰ふあり。陛下は内官と樂み

ふまふり。帝宣ひく。天下太平の日。いりある危きことあり。劉陶が曰く。四方の逆徒蜂の如くお起りて。州郡を掠め乱る。其禍は皆十常侍が。官を賣尺を害するも因り。朝廷の徳ある人の隠れ去。詔使の人臂を張。其禍は目の前あり。十常侍之を聞て。皆冠りを卸て涙を流し。大臣のくのごとく。臣等を疾んで害せんと。願くの一命を乞受て故郷を回り。官をぞとて。身を全うせんと哀みければ。帝大いお怒て。劉陶に向て宣ひける。汝が家も近侍の人を用。朕なんぞ常侍の官をりらんやとて。武士を命じて首を斬らる。劉陶哀しむ叫び。臣死すとも何ぞ怕ん。惜ひべし。漢朝四百年の天下。今日忽ち滅びん事をと云ふて。門外へ引出さる。時司徒陳璜外より來りける。劉陶を斬んとするを見て。急み是を止め。宮中へ入て天子を見へ。劉陶いりなる罪ありて。誅し。まふと問ける。帝宣ひく。みだり又十常侍を議して。朕が心を冒す。このゆゑに誅せしむ。陳璜が曰く。天下の民みる十常侍が肉を啖んとをねがふ。まゝりる。陛下これを敬みて。父母のごとくし。まふ。こをいりある理ぞ。十常侍の身一すの功もあくして。みち列侯に封せらる。況んや封爵。徐奉等。黃巾の賊は賄賂を受けて。内應せんとし。るものあり。陛下早くこれを誅し。まひ。漢の天下よりあふせ。亡くべし。帝宣ひく。封爵等が賊と内應したりといふ。みち實なきとあり。十常侍の内。一。二の忠臣あり。あつ。汝みだりお議することあり。陳璜を再三諫け。帝大いお怒。まひ陳璜をもひき出して。劉陶とも。獄に下し。まひける。十常侍の夜ひそり。人をつり。して。二人を死させける。こと哀し。その。趙忠使を以つて。孫堅を長沙の太守に封じ。謀反の賊を誅せしむる。五十余日を經て。長沙の逆徒。區星。そで。滅びたりと奏しければ。十常侍勅命を傳て。孫堅を烏程侯に封じ。又劉焉を益州の牧に封じて。四川の賊徒を誅せしめ。劉虞を幽州の牧に封じて。滎陽の張舉等を討せしむ。劉焉先兵を引て四川を攻ければ。

賊徒盡々降参し。即ち倉庫を開き。百姓を賑ひ。國中その徳も服して。不日にも皆平定す。劉虞の兵を起して。漁陽
 に向いんとする所も。代州の劉休書簡を添て。玄德をよむ。劉虞大いに喜び。玄德を都尉とし。丘毅を先鋒として。
 漁陽は下向し。数日戦ふて。勝負を分たざる所も。賊將張純。凶暴を専らふして。みだりに士卒を擧うちける故。諸軍
 心を變じて。張純が首をとり。盡々降人を出ければ。張舉もこの諸軍を見て。自ら頸を懸て死けるゆゑ。漁陽忽ち
 平定せり。劉虞表を上つりて。玄德の勳功ある由を奏しければ。朝廷詔のりを下し。往日督郵を打たりし罪を宥て
 下密の函を封じ。又高堂の尉を遷る。公孫瓚も表を上つて。玄德の前。拔群の功ある由を奏聞しければ。即時
 別部司馬を任じて。平原縣の令を封せらる。玄德恩を謝して。平原に到り。此所の饑餓の用意澤山にして。軍馬の
 備もあきらめるゆゑ。日比の氣を直して喜びけり。劉虞の。漁陽を平らげたる功も因て。大尉に任せらる。中平六年夏
 四月。帝御不例のとありて。日くは重り。今すであ危くありければ。密に何進を召て。鞅ひて殺さんと謀らまふ。其故
 を委く尋ねれば。此大將軍何進の。元來その身極めて賤しき者ありしが。其妹天子に寵せられて。貴人と成りける故也。
 其身の大將軍も上て。天下の兵權を取。弟の何進も。執金吾も封せらる。去ぬる光和三年。何進が妹。何貴人。太子劉
 辨を産り。是は因てつひは皇后も立らる。何進の皇后の兄たるも因ていよく。權柄を取り。其後帝又王美人を深
 く愛し。まひて。此腹は劉協と云へる皇子出来たりしり。何皇后是を妬んで。了は王美人を鳩毒めて殺せり。此の
 名は劉協の。漢皇后は養はれ。己は太子劉辨。幼年九歳に成らせ。まふ時より。帝いり。思召をけん。弟の劉協
 天下を禪んとて。常々近侍の臣も宣ひければ。十常侍并は黃門。蹇碩等ひそり奏して。やける。若し劉協は天下を
 禪らんとはつし。まひ。先何進を殺ら。まへ。太子劉協の。何進が妹の腹は出来たれば。何進兵權を専らふして。つ

いの劉辨を君とせし。今陛下は。憐れで。危し。是は事。跡のと云置んとて。何進を宮中へ召き。兵を伏てこ
 きを殺し。其後劉協を立。まひ。後の禍ひあるべから。帝こも因て。つひは何進を召をければ。何進いそぎ宮
 門に入んとする所も。司馬潘隱來り。密に私語て。内へ入ら。まふ十常侍。兵を伏て殺さんと謀れりと告げれば。何進
 大いに驚き。急ぎ門前より引くへし。百官を私宅もあつめて。十常侍を誅せんと謀。時未坐より一人をみ出。
 内官の勢ひを得。沖帝。質帝の時より。相ついで。朝廷は滋蔓を何んぞ。盡々滅とを得ん。若し計ごとを任損じさ
 ば。却て大いなる禍ひと成ん。よく子細も。まへと云ければ。諸人これを見。典軍校尉曹操なり。何進笑て
 やける。汝小輩いづくんぞ。朝廷の大事を知ん。猥りも多言とるとあり。時潘隱走り來り。天子今嘉徳殿崩じ
 ませ。十常侍を。先何進を宮中へ召て。後の禍ひを除き。劉協を立て。後位を繼ぎめんと
 ぞ。定めて使來るべしと云ける所も。忽ち勅使來り。天子とて。早く何進を召して。後のこと託し。まふと
 云ければ。曹操が曰く。今日の計ごと。先君の位を正て。其後賊を討。まへ。何進が曰く。誰か我を。君を正して賊
 を討ん。時一人をみ出。曰く。某願くは。五千の精兵を率し。新君を冊づ。立。盡々内官を誅せん。諸人こを
 を見。其人親相慰。行步威ありて。四世三公も登り。門下は故吏多く。武藝群を。汝南汝陽の人も。漢の司徒袁
 安が孫。袁達が子。袁紹字の本初。と。司隸校尉あり。何進大いによろこび。袁紹を。御林の勢
 五千余騎を率して。た。内裏を。四方を圍んで。人を通さ。何進の何。荀攸。鄭泰。さ。いへる。大臣
 三十余人。とも。相續して。宮中へ入り。靈帝の松の前。太子劉辨を。帝位も。即た。ま。百官も。万歳を祝
 し。袁紹兵を下知して。内官を捕し。蹇碩。と。逆。所をも。み。み。つ。つ。出。拒。ける。袁紹。

奪る。司隸校尉袁紹はより告て曰く。十常侍等のごろ諸所よりひ傳て。將軍の袁太后と死しませ入る。天下を
 奪の企てありと抄抄は。このとまよのつて内官を一人ものことせ殺しませへ。さうらせに後大いある害をあたへん。
 ひりし實實の計ごころをあたへて奪おらせ。却てその身と滅せり。いま將軍兄弟御林の軍を統すまひ。手下は英雄の
 大將おはし。事ごころを奪るるあり。これ天の助る所あり。何進が曰く。心も如是し。日を定てこれを誅せん。十
 常侍の事ごころをへまへ。いそぎ何廟を賄賂して頼げまへ。何太后の宮中に入り。奏して曰く。大將軍
 いま新君を佐せまへ。仁慈をもつて天下を治ることを思定。事人人を誅せごころを好まへ。いま四海太平ある。又十常
 侍を誅せん。とまへまへ。これを乱を招の道あり。早く誅せまへといひけまへ。何太后をみる。何進をりし。内官の權と
 執り。漢家の舊規。先帝近比崩じませ。汝いま内官を盡く誅せん。とぞ。これを社稷を重んぶるの道あり。決
 してこの事行ふと勿れと宣ひければ。何進もとより外より大名を好むといへとも。内は決斷する者あり。兎角の
 返事もあくて。退出せ。

○董卓起兵入洛陽

何進退いて家へ回りければ。袁紹問て曰く。事いり定れる。何進が曰く。十常侍を殺すこと。太后更に許したま
 へ。袁紹が曰く。諸國より英雄の武士を召し上せ。大い兵を集めて威勢をみして。十常侍を誅せん。何進が曰く。
 此計ごとく心合へり。我太后の命を承せまへ。推して十常侍を殺さん。彈りあれば。他國の諸侯を呼で殺し
 じへし。主簿陳琳とみ出て曰く。此事甚だ無用あり。世の終るも。自ら其目を掩ふて去。燕雀を捕る。是自ら欺
 くありといへり。微の物もも尙欺くことを得せ。況んや國家の大事。詐りを以てあすべけんや。將軍今皇威を違て

天下の兵權と手は握玉へ。龍驤虎歩心は。計ごころをさし玉ふべし。今又内官を殺さんと誅し玉へん事。炭火を
 熾んとして毛を焚よりやすし。只事を決斷して。自ら征伐し玉へ。天人とも願つて。即時誅伏すべし。若は
 り兵を招き。他國の武士を都の内へ入玉へ。英雄各々心を生じて。大亂の基とあらん。是所謂。倒す干戈を持
 て。人へ授る柄を以てするの譬に似たり。事あり破べし。何進笑て是僞夫の見あり。汝無用の舌を動すこと勿
 せと云ける時。一人手を打て大い笑ひ此事極てやすし。長詮義無用ありといふ者あり。諸人は是を見れば曹操あり。
 何進問て曰く。汝いりある計ごころある。曹操答て。内官の禍ひ古今みる此の如し。只人主の寵幸して近侍せまひ
 る故。自りら權を執て浸潤の疾とあす。今もし其罪を正さんと思ひませ。惡人の張本と除ら。典獄の官も命じ
 て誅せしめませへ。ゆゑ他國の武士を呼んで。盡く誅せんと宣ふ。事必敗るべしと云ふ。何進大い怒り。
 汝一心あると云ければ。曹操外に出て哀み哭き。天下を乱る者あり。汝何進ならんとぞすける。何進ついで諸
 人の諫を用す。刺さへ詔のりを降して武士を招く。其詔り曰く

朕聞 敗し紀 乱常。不日無誅。害國傷時。豈能彌久。切惟常侍張讓段珪等。濫叨寵榮。恣
 生強逆。不思報本之恩。復造滔天之禍。意喜者一門榮貴。心怒者九族誅夷。令諸侯於
 畿甸之外。挾天子於宮闈之中。上下切齒。咸々怨殄。滅一朕素知下卿等心懷忠義。討戮奸
 邪。逆提雄虎之師。討定蕭牆之禍。詔書到日。火速奉行。宜休三朕懷。遐爾知悉。
 先詔書を發して。四道の軍馬を召す。第一東郡の太守橋瑁。第二并州の刺史丁原。第三河内太守王匡。第四前將軍
 卿侯領。西涼州の刺史董卓あり。此董卓の字は仲穎。臨西臨洮の人。身長八尺。腰の太さ十圍。肌肉肥重。潤面方口

ささふ黄巾の賊を討時さまでの功もあがりしが。十常侍も賄賂を興へて。此の如く大官を得たり。時西國の軍勢二十万をわつめより謀反の企てありける所。天子詔を下して。都府上るべき由を勅し。まひければ。天の助哉とよろこび。其婿中郎將牛輔を留て陝西を守らせ。自ら李傕。郭汜。張濟。樊稠を伴ひ都を指て上りけり。其内中郎李傕と云者あり。計ごと深くして是も董卓が婿なりしが。進出て申しける。今天子詔を下して。將軍を招き玉へ共。今の世の君臣禮を乱て。う様の事ふも詐り多し。先表を以て天子を奏し。其後大軍を引て都の内へ入玉ひ。名正しく言願ふて。事うならせ成就をべし。董卓是も。從ひ。即ち幸備を表を遣らせ。飛脚を駈て都を送し。何進是を得て開ら見る其文曰く

臣伏惟天下所以逆有不正者。皆由黃門常侍張讓等侮慢天常操擅王命。父子兄弟並據一州郡。一書出門。便獲千金。京畿諸郡。數百萬膏腴。田皆屬三讓等。至使怨氣上蒸。妖賊蜂起。臣前奉詔討於扶羅。將士饑乏。不肯渡河。曾言欲請京師先誅三讓。豈以除氏害。從三讓。乞求資直。臣隨撫慰。以至新安。臣聞楊賜止沸。不如滅火。去薪。潰瀆。雖痛勝於養毒。成仇。及溺。呼船。悔之。無及。昔趙鞅。與晉陽之兵。以逐君側之惡。臣願鳴鑼。鼓入洛陽。誅三讓等。一則社稷幸甚。天下幸甚。

何進表を披見して群臣示しければ。侍御史鄭泰曰く。董卓の虎狼あり。若今都の内へ入らば。必人をも食ふべし。何進曰く。汝少も疑ふ事勿き。盧植進み出て曰く。吾よく董卓が心を知り。面を善と現して。心は。大い。狼。常。不仁の心を扶さひ。若禁廷へ引入る。必大いある禍ひを成ん。早く人を遣して。本國へ回しめ。董卓の患を免れ

さへ。何進叱てやける。汝等の志ざし。さ者共あり。枉て君の祿を食。妄り。舌と動して。人の心を惑。と勿き。鄭泰盧植其從のさるを見て大いお哭き。こを必天下の乱と成べし。まり。此所。居て禍ひを被らんより。身の難を逃きて。閉居せんとて。二人官を辞して去ければ。荀攸を始として。同く官を辞する者大半。及べり。何進亦やも心も曉らす。人を出して。董卓を迎へければ。董卓す。で。滎池。兵を屯して。未都の内へ入らず。去程。十常侍の何共。かく國々より勢の上る由を聞て。い。成。も。と。相。議。する。張。讓。曰。こ。を。何。進。が。計。と。よ。て。我。等。を。討。ん。爲。あり。我。等。早。く。手。を。下。せ。ん。べ。り。さ。ら。三。族。を。滅。せ。ん。と。て。密。り。屈。強。の。兵。五。十。人。を。す。ぐ。り。出。し。て。長。樂。宮。の。嘉。德。門。へ。伏。候。首。何。太。后。見。へ。哀。ん。で。や。ける。今。大。將。軍。勅。命。と。号。し。諸。國。の。勢。を。呼。上。せ。臣。等。三。族。を。滅。さん。と。し。さ。ま。ん。願。く。は。太。后。憐。み。を。垂。て。救。玉。へ。と。て。頭。を。以。て。地。を。叩。き。聲。を。放。て。哭。き。け。ば。何。太。后。曰。く。汝。等。自。ら。大。將。軍。の。府。下。へ。行。て。直。に。此。事。を。哭。き。候。へ。張。讓。曰。く。臣。等。自。ら。行。ば。盡。々。く。微。塵。も。あ。る。べ。し。願。く。は。太。后。此。所。へ。大。將。軍。を。め。し。て。臣。等。が。命。を。乞。て。助。け。玉。へ。若。此。事。叶。あ。ら。ま。じ。ま。て。は。い。ハ。力。あ。く。皆。こ。の。所。よ。て。首。を。刎。て。死。せ。ん。何。太。后。即。ち。詔。の。り。を。下。て。何。進。を。宮。中。へ。召。れ。け。ば。何。進。急。ぎ。行。んと。する。を。主。簿。陳。琳。諫。て。曰。く。此。詔。の。り。の。う。ち。あ。ら。す。十。常。侍。が。計。と。と。あらん。決。して。輕。く。行。な。ま。事。な。り。ま。何。進。曰。く。太。后。詔。の。り。して。我。を。呼。な。ま。ふ。如。何。ぞ。行。ざ。らん。袁。紹。曰。く。事。の。用。意。已。具。り。て。勢。以。早。應。れ。あ。く。外。又。知。ら。り。將。軍。今。宮。中。へ。入。て。何。事。を。議。せ。ん。と。思。ひ。ま。ま。ふ。ど。早。く。心。を。決。して。事。を。起。し。ま。へ。延。引。せ。ば。害。あ。ら。ん。何。進。曰。く。と。で。我。掌。こ。の。内。の。事。あり。何。の。害。う。是。あ。ら。ん。曹。操。曰。く。是。は。と。ま。で。用。意。して。外。の。く。ま。さ。と。ま。さ。を。先。十。常。侍。の。奴。原。を。宮。中。より。引。出。し。て。其。後。又。行。な。ま。へ。何。進。わ。が。笑。て。曰。く。こ。こ。小。兒。の。見。あ。り。我。天。下。の。兵。權。を。執。ん。と。の。我。よ。ち。の。付。者。あ。ら。ん。袁。紹。曰。く。將。軍。の。た。く。行。

袁術翠
花標
火を放つ



んと思し召バ。我等皆兵を引て相從ガハん。曹操も来リ、まへとて。二人さびしく。甲て精兵五百余人を。弟の袁術に領せしめ青嶺門外に陳をとらせて。袁紹と曹操といひ百人を従ガへ。何進を守護して内裡に入時ハ。長樂宮より黃門官出きたり。太后深宮の奥に御座ありて。將軍と密のふ一大事を議せんと宣ふ。たゞ一人入らまへと云けれバ。何進從ガふ者共々宮門の外に留め置。一人昂然として傍のらふ人さきガ如く。進んで嘉德殿の門に入れば。十常侍み亦出迎て。四方より打のこみ。張讓聲を屬して曰く。袁太后のなる。罪ありて汝是を殺し。國母の喪葬は。虛病して出ざるハ何也。汝元來屠沽の家より出て。我等がすめめ因こそ。のやう富貴を極め。今其恩をわす。反て害せんとするハい何の理ぞ。我等をみ亦濁れりといへるガ。清き者の何あると責ければ。何進答ふベき言なく。路を求て出んとする。宮門盡く閉て走るベきやうあし。張讓聲を揚て出よくと呼りければ。門の

隙より五十余人の士卒。手ごと刀をぬいて走り出。何進を引張てすくまぞ欲たりける。張讓即ち大尉樊陵を大將軍として。何進を襲代しめ。宮門を盡く開のせけ。袁紹曹操あまより待のね。太將軍早く回らせまへと呼る所。黃門官壁の上より何進が首をきげ出し。何進が謀反のりを受けて誅し了れり。其の盡く殺さふと呼る。袁紹是を聞て大いに怒り。内官をよとて大將軍を殺したるぞ。寄や者共惡黨を逃すかと罵りければ。何進が大將吳匡といふ者。青嶺門に火をのけたり。是を見て袁術が五百の勢盡く宮中に入り。老少男女を分さず。當を幸ひに切廻る。袁術曹操二人劍を拔て深宮に入り。樊陵。許相。内より走り出。狼藉とるかと呼る所を。袁術飛のりて秋り殺す。趙忠。程曠。夏暉。郭勝。四人のさびしく追きて。翠花樓の上より走りけるを。袁術追のけて火を放ちければ。四人こらへ兼て。樓の上より飛けるを一々さき殺せり。去程に火焰ははびこりて。武士ども宮中に入りければ。張讓。段珪。曹節。侯覽。若や助あるとて。何太后其外劉辨劉協を唱ひ奉つり。内省の官人を引つ。後の路より北宮に走る。此時尙書盧植の官を棄て隠遁せんとて。未去ずして居りしが。宮中の騷動を聞て鐘取て投のけ。戈を掲げて閣下より望ハ。段珪自ら何太后を引て出走る。盧植聲をわけて。逆賊段珪は死する事を知す。太后を引ていづくへ行ぞと。言をのけければ。段珪前より伏勢ありと思引返して走ける時。何太后窓の内より跳り出まふ。盧植念に馳きたり。何太后をすくひければ。段珪是を奪及ばず。跡をも見せして逃りけり。吳匡のあまより腹を立て。すま内庭まで攻入ける。何進が弟何苗が劍をぬいて出るを見つけ。此何苗の十常侍が賄賂いを受けて。骨肉の兄を殺したる曲者ぞ。逃する首を取て。主の聲を報せよと罵。刀を舞して追のけければ。つらく兵卒二十三人我先と馳来り。争ひて斬て徹塵ます。袁紹の四方の門をこちて。内官を見れば。大小を論せすころと

しむ。此も因て暫時も宮中死する者二三万人。鬚さき人の内官ありとて。誤つて斬きけり。曹操兵を下知して。内裡の火を滅させ。袁紹と何太后を請じて。燒のこりたる宮中へ入る。勢を四方に分て天子を尋しむ。此時張讓段珪二人の帝并び陳留王を劫らして。火の内烟の中にもいひ。後宰門より出て。北邙山へと志ざして落ける。日とて。夜も暮て。初の間。二十四人ありける者共。盡々迷亡て。夜の二更の比。いづく共なく。喊の聲大いひ。河南の椽吏閔貢といふ者。大勢みて追のけ。すてよあひ近成て。張讓いづくへ逃るぞと呼りければ。張讓の事の急あるを見て。頭を以て地を叩き。帝も向てすける。臣己みのぐるべき路を。陛下能龍体を保ちまへとて。河中よとび入て亡びければ。段珪たり一人。路をたづねて走りけり。帝の陳留王と追手の虚實も知がふければ。河のはとりある。草の中へ伏のくきさせまひ。兄弟を吞で。涙涙咽びまふ。時中平六年八月二十四日の夜也。己は四更の比。至。露冷の御衣を濕し。殊更今朝より飢疲をまひければ。二人手をとりて草莽の中へ伏まらる。陳留王宣ひける。此所よりくつてあらんも然るべからず。只路を求て命をたすり候へんとて。帝の御衣を我衣と給ひ合せ。草を分て出まふ。目と共知ぬ暗き夜。荆棘路は満りし。御足も傷を損じて。そゝびへさやうありし。天を仰てあきらみまふ。所よふしきや。數万の笠いづくともなく飛あつたり。光をはさちて帝の御前よきたりける。陳留王大い喜び。是天の助なり。これを指南に出ひんとて。螢火は道をひらきて。やうく歩出まひこき。その人の通山路を覺し。所まで出て。二人手をとり。一たび歩んで。五更の比。いづく。一すも驚きまひ。岡の前なる草の上へたを伏て哭まふ。此所。世の濁ると厭て。年久しく間居せる者あり。夜深がのとをき。よく寐入て居りし。俄に紅いの日輪二つ。家の後へ落りし。夢を見

て。おどろきて興上り。おまりのふしき。なま戸を開て望み見。ふり草の中より火の光天よあがる。家主大いあやしむ。走り出て見。二人倒て伏る者あり。家主問て曰く。こをある少年の離家の子ぞ。陳留王昔て宣ひく。是るの大漢の皇帝なり。十常侍が乱み達て。夜中よ是まで出まへり。家主大い驚き。地を再拜して曰く。臣の先朝よ仕る。司徒崔烈が弟の崔毅あり。十常侍が官を賣。賢を妬を見て。世を逃きて。此所よりくれりとて。帝を扶て。屋に入奉つり。跪づいて酒食をす。帝御心を安じまひ。陳留王と崔毅が家も隠て。御座ありける。河南の椽吏閔貢の。段珪が逃を追て。遂に生取。帝をいづくへ。隠し奉つりたるを問。段珪答て。事急ありし。ゆる道の傍ら。拾たりと云け。閔貢よくして。其首を斬て馬の鞍につけ。終夜が帝を尋て。崔毅が家も来り。餘りも飢つり。一飯を賜り。まどをけければ。内より崔毅出向ひ。鞍を控りたる首を見て。仔細を問。閔貢し。と語る。崔毅喜ひ。たへす。引て帝を見へさせ。君臣をわけて大い哭く。閔貢曰く。天下一日も君なくんば有べり。早く都へ回り。まへとて。崔毅が飼る一匹の瘦馬を備て。乘奉つり。我馬は陳留王を乗しめ。て家をはきて。二里をりり出ければ。向より司徒王允。太尉楊彪。左軍校尉淳于瓊。右軍校尉趙萌。後軍校尉鮑信。中軍校尉袁紹等。數百騎を引て馳きたり。帝を見へて大い哭き。先段珪が首を都へ上せて。市にさらさせ。連年の儀式を取つ。より先。洛陽の小兒の。話の。侯非。侯。王非。王千。乘万騎走北邙。と話し。今日の事。思ひ合さたり。かくて御駕路を急ぎ。三里もまぎける所。向より。趙天を蓋い。馬烟り大い。甲たる軍勢野は漫り。山は滿て出きたり。百官色を失ひ。皆茫然として。怖き。袁紹馬を出して。何者ぞ。運幸の路を。どと問。太く。大將。錦の旗の陰より。天子の何。呼りければ。帝を始め奉つり。御供の百

官蓋々く塵を冷して再々び言を出と者あり。陳留王馬を出して來者ありまよものぞ。の名を聞んと問うまへ。彼大將者へて曰く。我の西涼の刺史董卓あり。陳留王宜ひける。汝こゝ來るの帝を守護し奉つらんが爲。又奉ひ奉つらんが爲。董卓曰く。我の天子を輔佐奉つらんが爲あり。陳留王の宜ひく。汝輔け奉つらんが爲。還幸よ参り遇て。あんぞ早く馬より下ざる。董卓あてて驚き。馬より飛で下。地の上は拜伏しければ。陳留王ちうくよりて。好言を以て慰勞し。董卓心の内此人の才覺よのつぬあふらずと驚き。共は御駕を守護して宮中よ入奉つる。帝の何太后見へて共は御涙を咽び。傳國の玉璽を失ひぬとて大い哭き。此玉璽の秦の始皇より以來。相傳りて。代々の帝國を保ち。すへる印ある。此時失たる。漢の世のおとろへたる故よとて。聞人眉をひそめける。

○呂布 刺殺丁建陽

董卓已は洛陽よ入。城外よ陣を取て。毎日さびしく甲たる。數千騎の兵を引て。城内よ打入。街市の邊は横行しけと。人民惶々として驚き。此時始て詔書を見。東郡の太守喬瑁。河内の太守王匡。并州の刺史丁原も兵を引て上りける。何進已は亡たるを。關を過。王匡の徒らよ回ける。董卓是より志ざしを得て。常は内裡よ出入して。憚る所なく舉動ければ。後軍校尉鮑信。安うらぬと思ひ。密りよ袁紹よ私語。いざ董卓大軍を引て都の内は縦横そりあらず。野心を挾むべしと云ける。袁紹許ける。朝廷近ごろ少し静まりたき。輕く兵を擧すべうら。鮑信又司徒王允よ語る。王允も從がらさりければ。かくて天下の乱とあらん。不し如身の難と免さんとて。鮑信の手勢を引具し。泰山へ還き去る。是より董卓が勢ひ。日よ盛んありければ。初め何苗よ從

ひし軍勢も。盡々其手よ屬と。董卓密に李儒よ問てやける。我今當今の天子を廢して。陳留王を位よ即んと思ひ如何。李儒答て曰く。いざ朝廷正るの時よ乘て。早よ計りまへ。還る時よ變わらん。明日温明園の内よ酒宴を設け。百官をわづめて此事を首出し。從にざる者を斬殺し。指し鹿の計と今日あり。董卓大い喜び。次の日温明園は酒宴を設て。百官を請ひければ。離り取て從にざる。其威に怕きて盡々來る。董卓人を出して百官の集り畢れるを察し。其後徐と馬を打て。轅門の前よめり。飛下り劍を帯て内よ入。一々相見て樂を奏し酒をそひ。己は半酣よ及で董卓百官よ向てやける。今一つの大事を議せん。諸官よく聞まへ。夫天子の万民の主あり。天下を治むるは威儀あり。宗廟社稷を保つとわらす。況んや先帝の密詔あり。劉辨の輕浮よし。君ととるよ足す。次の子劉協の聰明よし。學を好む。漢の基業を繼ぐべしと宣へり。我當今の天子を廢して。舊の如く弘農王とし。陳留王劉協を。帝位よ即奉つらんと思ひ。面々此事を思ひ。百官是を聞て大い驚ろき。默然として居たる所。忽ち一人前なる卓兒を推のけ。昂然として曰く。無用。汝何者をも左權ある言を吐出せる。朝廷よ人のあきと思ひ。當今の天子の。漢の靈帝の嫡子つひ。德よ負さす。安んぞみだり。廢とることを得ん。我よく汝が野心を知。離從がふ者あらんやと。いり呼りければ。諸人汗をかかして。是を見る。よ。并州の刺史丁原字の建陽あり。董卓怒てやける。朝廷の大員も。なは未だ言を出さず。汝あよ者なき。汝妄りよ舌を動くを。劍を拔て斬んと。時丁原がらしる。身の丈一丈バウリある男の。腰の太さ十圍にして眉目清秀。五原郡の呂布字の奉先とて。天下よ双る。馬の速者よ。幼きより丁原と父子の約を成る。手よ方天戟を提さげ。怒るる眼星のどとくよして立たりけき。李儒是を怕れ。急に董卓を推と。國家の大事の酒後よ

論をべりし。明日朝廷よて公論しつと云けり。百官も丁原をぞめてりへらしむ。董卓又百官を向て。我云
 所公論はわらすや。いりと思ひつと入ると問々き。盧植席を起て曰く。足下の論相違せり。昔般の太甲無道ありし
 う。伊尹こそと桐宮を放ち。漢の昌邑王位を登て。僅に二十七日の間。三子余條の罪を犯しつとひし。伊尹は
 を大廟を告て廢せり。當今の天子御年幼きしとさせ共。聰明仁智にして毫髪も過さし。足下の元外國の刺史にして。
 國政をわすけらば。又伊尹程光が才あり。安んぞ廢立の事を論せべき。古人も云へり。有伊尹之志。則可無伊尹之
 志。則無也。足下強て此事を議しつと入る時。天下を奉んとの企ては似たり。董卓大い怒り。劍を抜て斬んとし
 けるを。侍中蔡邕。議郎彭伯二人推しめて曰く。盧植は海内の大儒あり。人こそを知らずと云者なし。今若是をこ
 しつと入。天下りあらず。震い怖れん。董卓これに因て其命を助け。官を剣で追出しければ。盧植は是より世を遣を
 上谷へ入て閑居せり。司徒王允こそを見長居せんとのめしうりかんと思ひければ。進出て曰く。廢立の大事りやう
 の時。論をべきはあらず。別日定めて議せんとして。百官盡々退散しければ。董卓それきき。一人も殘さず斬
 て捨んとて。劍を抜て植門のうらふと出ける所。呂布馬を打乗。戟を提さげて門外へ往來と。董卓其氣色を見て
 李儒を問て曰く。彼いりある人ぞ。李儒曰く。是丁原が父子の約を成さる。五原の呂布といふ者よて。その勇天
 下は双ぶものなし。董卓いよく怕き。國を廻りてさけられ。百官は因て無事なることを得たり。次の日。丁原兵
 を引て董卓が陣へ推寄せき。董卓大い怒り。自ら出て望み見。呂布金の益をいた。百花戰袍を被て。唐舞
 の鏡。舞臺の寶帯をかけ。手は方天戟を執て。馬を驅らせ往來とる行裝。あつたも天神のごとくありければ。心の
 内怖を盡く。時丁原馬を出し。大音わけてやめる。漢の天下不幸にして。内官權と専らし。万民みち塗炭の苦し



みをうく。汝是涼州の刺史。國はわめて一寸の功あり。安
 んぞ安ん廢立の事を議する。是まことと。蘇逆の賊ありと
 呼りけき。董卓答へ言さく。呂布が討てかゝるを見
 て。陣中へ逃入けるを。丁原急に攻りし。大い破
 きて三十里引退く。董卓諸々の大將をわつめ。呂布が勇猛
 あるを見る。目を敵と事あたふまじと思あり。若此者
 を味方とささ。我かんと天下を慮る。と云ければ。
 一人とみ出て曰く。某がし。呂布と同郷の友あり。其心
 をよく知り。勇ありて計ごとく。利を貪りて義を見そ
 る。某がし。いて利害を説。必味方よ來るべし。諸人こ
 色を見れば。虎賁中郎李肅あり。董卓よろこんで問て曰く。
 汝いりして呂布を降さめん。李肅曰く。君の秘藏し
 つまふ赤兔馬。あつびに金銀を興へたまへ。其心をひそん
 で味方とささん。董卓こそを李儒を問。天下を得んと思
 つまひ。かんと一匹の馬を惜さんと云ければ。董卓げよ
 めとて。やがて彼馬を引せ。黄金千兩。明珠玉帯を渡しけ

れバ。李肅こきを得て。從者二人を引つれ。夜中、呂布が陣より逃げければ。番の者ども亦も者ぞと問。李肅が曰く。且
 色ハ呂將軍の舊き友なり。早く報せよといひければ。急ぎ此よしを報せ。呂布よび入て對面しければ。李肅禮を施し
 て曰く。賢弟別てより恙なきや。呂布怪みをおしてやける。御邊のいふある人ぞ。李肅が曰く。同郷の友なるを。何
 とて見せしめよ。某ハ李肅あり。呂布おぼろいして手を拍。問てやける。御邊今いつくも居たまふぞ。李肅が曰く。
 我漢朝に仕へ。虎賁中郎將の職を受。今御邊社稷を扶るのこゝろありと聞て喜びまたへせ。名馬あり一日千里を
 走る。氷を渡り山を超へると。平地を行かんとし。名けて赤兔と稱す。是を御邊に贈て。虎威を助けん爲る來きりと
 て。引いしければ。呂布是を見る。其馬全身火よりも赤く。頭より尾まで長一丈。蹄より尻みまで高さ八尺。嘶
 聲ハ空を騰り。海入の狀ありけり。呂布大いに喜び。うゝる名馬を賜ひる。某亦もを以てり報せんと云ければ。李
 肅すける。某義の爲る來る。豈報をのぞまんや。呂布酒宴を設けて持たしければ。半酣に至て李肅すける。今御
 邊とたましく相逢。御邊の父ハ此馬をよく知たまへり。若又見たまひ。うさかき喜ひたまふべし。呂布笑て曰く。
 御邊の酒ハ酔たまふ。李肅が曰く。吾更に酔せ。呂布が曰く。某父ハ世を辞してとて久し。何ぞ此馬と見る事わ
 かん。李肅大いに笑て曰く。某が父ハ丁原あり。呂布が曰く。吾久しく丁原が處よりありて。今更出べきやういひせ。李
 肅が曰く。御邊の拳入架海の才あり。四海たれり知ざらん。功名富貴。囊を探りて物をとるよりもやとせし。何ぞ出べ
 きやうあしといひたまふぞ。豈いつまで人の下居て。區々としてとせし。まらんや。呂布が曰く。且も大い其能
 を展んと思へども恨く。然るべき君あり。李肅が曰く。良禽ハ木を相んで栖。賢臣ハ主を擇んで佐く。こそ承
 けい。日月の遷りやとせし。空しく年老果ると。後悔ととも益あるべし。呂布が曰く。御邊ハ朝廷の内にて誰

ぞう英雄と思ひたまふぞ。李肅が曰く。吾おまねく百官を見よ。董卓及ぶせ。董卓ハ賢を敬ひ士を下り。寛仁にして
 徳わつく。賞罰極めて明りなきや。つゝふハ大業を成たまふべし。呂布が曰く。我元より董卓ハ仕へんことを願へど
 も。其縁なきを恨むるあり。李肅さくもあへせ。金珠玉帯をとり出しければ。呂布驚ひて曰く。是はいつある仔細ぞ。李
 肅わたりの人を退けて曰く。是ハ董卓久しく御邊の徳を慕て。某を使として此禮物を送りたまふあり。董卓の赤兔
 も皆董卓の賜ものあり。呂布が曰く。董卓史くくのごとく吾を愛し。たまふを以てり徳を報せん。李肅が曰く。我
 等も亦も用ひて虎賁中郎將とせたまふ。御邊もし仕たまひ。富貴心の隨するべし。呂布が曰く。何せん是を報せべ
 き功あり。李肅が曰く。掌ころぞうへと内あり。御邊亦もとて是を爲する。呂布しづく思案してやける。此所
 御待し。我中軍ハ入て丁原が首を取。行て董卓ハ獻つるべし。李肅が曰く。恐く御邊あり。呂布刀を提さげ
 た。ちち中軍ハ馳入ければ。此とき丁原燈火をうらげて書を見て居ける。驚ひて問て曰く。我子亦もとありて夜
 中來る。呂布が曰く。吾ハ當世の大丈夫。安んぞ汝が子とあらん。丁原あてて起て。亦も亦も俄り心の變じた
 るぞと。いふも果ぬ走りりりて。其首を一刀うち落し。大音あげてやける。丁原不仁ありしも。吾ぞでよ
 斬殺せり。志ざしある者ハ吾ハ從がえ。志ざしなき者ハ早く回ると呼りければ。落去者大半及べり。李肅大いよ
 よろこび。先りへりて董卓ハ報じければ。董卓酒宴を設け。自ら出て呂布をむらへ。馬より下りてやける。今呂奉
 先を得て。早苗の雨を得たるがごとし。呂布再拜して曰く。某今暗を棄て。明りある仕ふ。願く父として力を
 つくさん。董卓喜びまたえせ。内ハ入酒宴をさし。李肅ハ重く恩賞をあらせ。呂布ハ金の甲鎧の袍をぞ賜ひける

○ 廣漢帝董卓弄權

呂布とて董卓を降りしり。董卓其勢を合せて威風いよく大いなり。即ち自ら前將軍を領して。弟董卓を左將軍野侯に封じ。呂布を騎都尉中郎將都亭侯に封せ。時々李儒を遣り。當今を廢して陳留王を立てしめんとす。呂布は之を聞きて曰く。董卓は從ひ。省中酒宴を設けて百官をわづめ。手は劍を執てやける。大いある者の天地。次の君臣。これを治をさる本あり。上禮を失ふ時。下みみ背く。今上皇帝閣下にして。天子とさるる足す。我今伊尹霍光が例に順かひ。帝を廢して弘農王とし。陳留王を立て君とせん。汝百官其心いりんと云け。群臣みみ背きて答る者なり。りし所。中軍校尉袁紹とみ出て曰く。むかし太甲不明ありし。伊尹是を放ち。昌邑罪ありし。霍光こそを廢せ。當今の天子徳ありて罪なし。汝いま嫡子を廢て庶子を立んとさる。謀反の心成べし。董卓大い怒り。天下の大事みお我あり。誰か吾もしたぐりさる。汝も劍をされまじと思て。廣言を出せりと云ければ。袁紹も大い怒り劍を抜てやける。汝が劍よくさる。董卓いよく腹を立。とてや大事。及んと見る所。蔡邕急止て曰く。事いまだ定まら。うろつく。殺したまふと勿き。袁紹の此のひびは百官を長揖し。劍を提さげて外に出。節を東門よりけ。馬もとひ乘て冀州を指て下りけ。董卓乃ち太傅袁隗に向て曰く。汝が姪甚だ無禮あり。我いま汝に對してこれを殺せ。廢立の事汝が心いり。袁隗曰く。まこと尊命のごとし。董卓曰く。百官の心いり。我命も背く者の軍法を以て事を行。百官みみ背ひ怖きて曰く。誰か尊命に従。つるべ。董卓又侍中周勃校尉伍瓊。議郎何顯二人を呼んで曰く。袁紹いま本國を指て逃下り。是謀反の心い。さすや。周勃曰く。廢立の事尋常の人の及ぶ所い。袁紹大体をま。恐怖して出走る。なんぞ野心を起。へ。今若急を遣ら。やむ事を得。して髮を生せん。其上彼の四代まで三公を昇りて。恩徳を四方に布。門下は故



更多くい得。若兵を集て事を興。時。山東の國々。從がひ屬せん。不知こを救して一郡の太守に封じ。其心を安らしめ。蔡邕曰く。某がさ。推し。めし。此も。袁紹の計ごとを好。決断。只。色を。一郡に封じ。諸人の心を安堵せしめ。董卓此義然るべし。即時其人を遣して。袁紹を北海郡の太守と。是より内外の政事。ことごとく董卓が料。ひとかりければ。九月朔日帝を嘉德殿に請じて。文武の百官をた。斬んと願け。一人も残さず來り。つまる。董卓劍を抜てやける。少帝閣下して全く威儀なし。天下の君とさる。今郊天の策文有よろしく。是を讀べしと云ければ。李儒た。讀で曰く。孝。皇帝。不。高宗。眉。之。早。皇子。皇帝。承。海。内。側。望。而。帝。天。資。輕。僞。威。儀。不。在。喪。慢。惰。哀。如。故。焉。凶。德。既。彰。淫。亂。發。聞。損。辱。神。靈。汚。宗。廟。皇。太。后。教。無。母

儀一統政荒亂。永樂太后暴崩。乘輪或焉。三綱之道。天地之紀。而乃有闕罪之。大者陳留王協。聖德偉茂。規矩遼然。豐下兌上。有堯圖之德。表居與哀。成言不。以邪岐。疑之。性有成周之懿。休榮美譽。天下所聞。宜承三洪業。為二方世統。可承宗廟。廢皇帝。為弘農王。皇太后還。政應天。順人。以慰生靈之望。

策文とてふよみ了りければ。董卓まづ天子を御座より引をろし。其璽綬をとと。北面して臣下の列み即しめ。何太后を引出して。其衣服を剝で平衣とみしければ。少帝も何太后も御涙よひせびたまふ。こまを見る人み赤面を掩て悲みける所。一人大音をあげ。賊臣董卓いかなき。天を欺ひて聖明の君を廢せる。不知汝と死を共みせん。とて。衆簡を揮て董卓を打てり。董卓大い怒り。武士を命じて引出さしむる。是即ち尙書丁管あり。聲をわけて君を背く。逆賊と呼りけり。董卓つゝい首を斬し。ひこみあつて。陳留王劉協を請じて。天子の位に即奉つり。百官みあ。万歳を唱へこと。く。禮をいりけり。何太后と弘農王とを永安宮に推こめ奉つり。奉り仕る者として。唐貴妃と二人の官女より外ありけり。其外外行者わら。わら。三族を滅さんと觸けり。志しむる老臣もいづづ。み悲しむるあり。例文し。此君四月に御位に即す。九月に至りて。董卓が爲。廢らせしめ。入。聞人涙をながさ。といふ者あり。陳留王劉協字の伯和。時に御年。づり。九歳。よて己に御位に登りたまふ。是と。獻帝と。奉つる。ま。董卓を相國に封じ。黃琬を太尉に。楊彪を司徒とし。荀爽を司空とし。韓馥を冀州の牧とし。張邈を陳留の太守とし。張寶を南陽の太守とし。董卓い。逆賊をふる。以。贊。名をい。朝。入。て。劍。帶。着。あ。上。り。よ。心。の。ま。い。行。ひ。庚。午。の。年。改。元。して。初。平。と。号。す。此。時。永。安。宮。よ。り。何。

太后と弘農王と久しくをしこめり。居たまふ上。朝夕の供御衣服。んとをも。は。く。く。く。献。ま。つ。ふ。ね。バ。日。夜。憂。ひ。悶。へ。させ。ま。ひ。て。御。涙。さ。ら。ま。乾。く。ま。も。あ。し。折。ふ。し。春。風。よ。意。を。得。る。一。双。の。燕。庭。の。内。へ。と。ひ。さ。り。け。れ。バ。弘農王一首の詩を作りたまふ。其詩よ。曰く。

烟 草 綠 煙 烟 異 々 双 飛 燕
 浴 水 一 條 青 陌 上 人 呼 義
 遠 望 碧 雲 深 是 否 舊 宮 殿 何 人 仗 忠 義
 實 二 我 心 中 怨

董卓つねに宮女を付て。其体を軟けせける。此詩を傳へ聞て。ける。この人より。我を怨むる心ありしけり。生て。置。後。の。書。を。あ。さん。ま。り。ま。早。く。殺。さん。と。て。李。儒。を。召。て。其。趣。を。語。り。け。り。李。儒。元。來。情。を。武。士。あ。る。も。自。兵。十。余。人。を。引。て。永。安。宮。へ。馳。て。行。此。と。何。太。后。の。弘。農。王。と。樓。上。に。居。ま。い。し。が。宮。女。さ。り。李。儒。が。参。り。て。い。と。云。け。き。バ。あ。ま。と。ま。り。と。か。を。ろ。ま。す。所。よ。李。儒。自。毒。の。酒。を。携。へ。さ。たり。弘。農。王。を。せ。め。め。て。す。け。る。バ。春。の。日。融。く。と。し。て。あ。も。し。ろ。折。ま。て。い。の。る。御。心。と。慰。め。奉。つ。ま。と。て。董。卓。よ。り。此。酒。を。送。ま。て。い。と。て。孟。公。を。捧。げ。し。り。バ。弘。農。王。泣。て。宣。ひ。け。る。バ。此。の。よ。も。酒。ま。て。い。あ。ら。し。う。る。ま。を。命。を。縮。む。る。毒。あ。る。べ。し。李。儒。が。曰。く。是。の。毒。酒。と。す。て。命。を。延。る。藥。ま。て。い。の。速。く。よ。ま。こ。し。召。る。べ。し。何。太。后。の。宣。ひ。く。汝。ま。こ。し。酒。を。飲。ま。ん。バ。自。試。み。て。後。に。飲。つ。ま。李。儒。眼。を。怒。して。曰。く。汝。を。早。く。飲。む。る。の。酒。を。飲。ま。ん。バ。此。二。色。を。受。ま。と。て。兵。を。命。じて。練。帛。の。繩。と。み。じ。り。さ。刀。と。を。取。出。し。け。り。唐。貴。妃。涙。よ。ひ。せ。ん。と。曰。く。妾。ね。が。い。く。此。酒。を。飲。で。二。人。の。御。命。よ。り。る。べ。し。李。儒。を。あ。ら。い。げ。叱。て。曰。く。汝。を。早。く。飲。む。る。の。酒。を。飲。ま。ん。バ。彼。等。が。命。を。代。ら。ん。と。い。へ。る。と。て。孟。公。を。とり。て。何。太。后。よ。り。め。汝。を。早。く。飲。と。責。け。り。何。太。后。胸。を。うち。て。宣。ひ。け。る。バ。兄。何。進。の。計。と。る。匹。夫。と。て。董。卓。を。都。の。内。へ。ひ。さ。入。り。う。る。禍。ひ。を。仕。出。せ。り。

李儒また盃を弘農王よりめ。汝をみやり飲せん。吾よく飲仕やうとしへんと。こえをわらへげければ。弘農王御涙をわらへて宣ひたる。うらる上り。をむくくの命と許して。母も腹をどせよとて。腹をわけて哭きまひ。歌を造てりみしみまふ。其歌曰く

天道易兮我何安 棄萬乘兮退守一藩 爲臣逼兮命不久 勢將去兮空淚潸

唐貴妃も悲しみふたへせ。弘農王抱き奉つり。泣く一首の歌を作る

皇天將崩兮后土頽 身爲帝妃兮命不隨 生死異路兮從此畢 奈何竿遠兮心中悲

と歌了りてとも悲み悶たまへ。李儒怒りてやける。董卓今いさことを待りねまらん。汝等あよめ命と惜んで

誰か助け待せと責ければ。何太后聲をわけ。國賊董卓天道のみを祈げんや。うさうを附をうむるべし。李儒匹

夫已等みお封を助けて悪をす。うちまち滅亡せんと罵りたまへ。李儒大いに怒り左右の手を執て。何太后

を樓のうへより投落せ。弘農王うさしみまひ。李儒が袖とりつぎまふを。武士ども鳩毒を灌ぎて打倒し奉つ

る。唐貴妃とつと喚て起ところを。李儒引捉へて絞ころし。やがてはせうへりて董卓告げれば。董卓大よりこび

三人の屍を城外へひき出して。一所よりつませ。いよく憚るところなく。毎夜宮中へ入て。宮女を淫淫し。自ら

龍床の上へ宿して。禁裡の皇女公主を犯しけす。前代未聞の惡逆なり。つねに兵士を引て。城外へ横行しけるがわ

る日陽城へ出て二月のとがる。村の貧賤。みぢ社日の祭を成て。多くあつまりければ。兵ものを下知して。四方よ

り圍み。一人も残らせ斬ころして。婦女をうばひ。財寶をうそめとり。殺せる者の首と車も載て城中よりへり。董卓

國こそ今日賊徒を討まひまといふ沙汰させて。其首を市にさらせ。婦女財寶を恩賞ありとて人あはとこす是



よりて人民の哭き日ままして。家業を安んせざりけれ
ば。越騎校尉伍孚字の徳瑜と云ものあり。いりあもして董
卓をころさばやと思ひ。出仕の衣裳の下に鏡をきて。懐ろ
短刀をかくし。董卓が朝は出る時。走りうりてむせど
捉へ。刀を抜て胸の邊を突んとす。董卓本より力まぶりの
まへりものあき。少しも騒ぎ伍孚を抱きとめて。罵る
せ。時呂布走り來りて。伍孚を眞倒し引仆しければ。董
卓アけるハ。伍孚を突とするハ。うさうを叛逆の與黨あ
ん。汝誰より頼む。明らう白狀せ。伍孚目をいりり
し牙をうんで曰く。汝ハ日夕君をわらす。吾汝が臣あふ
ず。何の叛逆といふとらわらん。汝國をみだり。位を奪て
惡逆天よとびこる。今日ハ日夕死する日あり。たへ恨むべ
し汝を市へひき出して。徹夜成さることを董卓大いに怒
り呂布も命じて首を斬しめ。こきより常用心して。出入
りあらず。さびしく甲たる兵士を従タへ。四方を圍せて横
行しけり。袁紹ハ渤海郡ありて。董卓が惡逆のよしを聞

て。密に人を上せて。司徒王允も書簡を送る其書曰く

卓賊欺天。虜主。人不忍言。入乱禁宮。神亦不祐。公反恣其跋扈。如不聽聞。豈為三報。國效
職之臣。載紹。今集兵練馬。欲圖掃清。帝室。未敢輕々。舉一公想。食三祿。於漢朝。當三乘。問。圖之
如有。願。使。即。當。奉。命。書。不。違。言。請。宜。照。察。

王允此書を得より日夜心を苦しめければとも。董卓を討べむ計ごとし。ある日参内して一座の公卿みち朝廷の書臣
みて。忠義の志さしある人ありければ。是こそ願ところと喜び。座中より向てかける。今日日某が誕生日よて
今夜の私の宅に酒を在らば得。酒をとりめやすんといひければ。人よりあらず参りて壽を祝せんと。王
允大いよるこび其夜後堂に席を設て。酒肴とりきりめら。酒を多く焼させて待ければ。群臣ことごとく来りわつ
まる酒宴敷刻よ及びける時。王允俄り哭きければ。群臣みちあどろひて曰く。うる祝の儀よ。あまことを哭さるまふ
ぞ。王允曰く。まこと今日日某の誕生日よていひけず。常より参り會んと存せれども。人のうちを以て。今夜
うく計ごとをさせり。我が哭ひ漢の天下あり。董卓が勢い如何ともとべきやうなし。某等いうある憂目を見も
がたし。昔漢の高祖三尺の劍を提げ。白蛇を斬て天下を保ちまいてより子孫相ついで四百余年。あんどをり
ん。今日董卓がめり哭されんとい。我等命を失ふとも。空しくこれを見忍びせ。一座の群臣これを聞て。みち
涙をさぐ。所みたちち未座より手をうつて大い笑ひ。朝廷の大臣夜に泣いて嘆きよいたり。董のうあしんで
よ及び。涙のうりく間もさく見へたまふ。董卓を泣ころしたまふ計ごとやあると呼りるものあり。諸人蓋ひて是
をみれば。驍騎校尉曹操あり。王允大い怒て曰く。汝の漢の相國曹操が驍騎にして。四百余年大恩を被り。國のた

りも害を除くことと思ひ。却て逆賊を助るのみよことぞ。汝もし今夜の計ごとと董卓を訴へば。吾とて死して後
も鬼神をありて。漢家を守らん。曹操曰く。某別事を笑ふわらず。さしもの大臣。董卓をころすべき計ごとあり
くして。女董のこごとく。日夜涙のみよひせびたまふを笑ひ。某不才もいふともねがはく計ごとをめぐらして。董
卓が首をとり。都の門を閉て万人の忠をすくふべし。王允よろこんでかける。曹操もし忠義の心あらず。是まこと
又天の助る所あり。ねがはく計ごとを聞ん。曹操曰く。近ごろ董卓が驍騎仕る。よき願もわらば。董さんめ
かり。董卓今はあま某を愛して大小の事盡く問とる。王司徒の董より希代の刀を所持し。まふと承まひる
願くは某も借たまへ。たやそく董卓を斬殺すべし。王允曰く。もし此計ごと成就する時。天下の大幸ありとて。
やがて刀をとり出して。曹操よて。此刀は希代の名作よて。長三尺わまり。七寶を嵌めて飾りをあし。その利
といふべからず。曹操こまを愛て。其夜の酒宴の休みけり

曹操謀殺董卓

曹操家よりへりて夜すでお明けければ。直ち相府へ出て。董丞相の何く居まふと。問ふ。曹操より書院へ居る
まふとす。乃ち行て見れば。董卓床の上坐して。呂布のりり侍立せり。董卓曰く。曹操あまことおそく来
れる。曹操答て曰く。馬腹で路をくひ。董卓曰く。且れ西涼州の名馬を得たり。呂布一匹あらひきたりて曹操あ
興へよ。呂布承まひりて出ければ。曹操心の内これこそ天の助けよと思ひ。そで刀を抜んとしける。いやしく
董卓の元來大力あり。卒爾あしあしがり。董卓の一人思ひ。しをらく嫌ひ居たるところ。董卓の一身肥ふて。常あ
久しく坐するとわたり。やありて横ああり。背を向て臥ければ。曹操とてやよら時分ぞと思ひ。急ち刀をぬきけ

れバ。董卓をよめる。魏の影ふて其体を見つげ。さばと起めたり。曹操をよめる。董卓をよめる。呂布をよめる。さたれり。曹操仕損じ。刀をよめる。さむむさやうさく。少も騒ぐ。魏の体めて柄を取直し。ひさまづらて。さびて曰く。某ち
 う比名譽の刀を求めていも。試すつらん。爲る帯きたれり。董卓手もとて。天晴よき刀あり。これ見よとて。呂布の渡
 せ。曹操又鞘を與へければ。呂布見おりて。鞘を収む。董卓馬を引せければ。曹操謝して曰く。願くは御前めて。こゝろ
 みゆ兼ひのん。董卓しうるべしとて。鞍を置せければ。曹操急を飛乗。鞍を加へて。行方しらす。失おけり。呂布曰く。
 ささや曹操の刀の献つりやう。不思議る体あり。さむむさ仔細るべく。董卓曰く。我も心の内より。くむやし
 ひ。今又急を逃たる。いりさす。事のもあむらん。時ふ李備は。より來りければ。董卓右のおもむきを委しく。語るお
 李備曰く。曹操が妻子一族。みさ都の外。ひへ。必。定。君。を。狙。と。ひ。ん。ん。早く人を遣して。呼まへ。彼二心なく。や
 るべし。參らせん。たちまちや。生取て。拷問をへし。董卓これ。ま。た。さ。ひ。番の兵士。六七。騎。を。命。じて。急ぎ。曹操を。呼
 返さし。曹ら。く。ありて。其人。う。へりて。曰く。曹操。さ。さ。や。責。ある。馬。を。乘。て。飛。が。ごと。く。東。門。を。さ。た。る。門。を。守。る。者。と
 も。何。へ。出。た。ま。ふ。と。た。づ。ね。け。れ。ば。其。急。する。御。使。出。る。あり。と。て。關。所。を。超。て。走。り。去。り。李。備。曰。く。是。り。あ。ら。せ。本。國
 も。下。り。て。事。を。發。せん。爲。さ。る。へ。し。董卓。大。い。怒。て。曰。く。我。曹操。を。愛。して。ふ。り。く。恩。を。ほ。と。こ。す。今。却。て。我。を。害。せ。ん。と
 する。い。何。ご。と。ぞ。急。ぎ。其。も。や。う。を。書。を。捕。し。國。を。襲。て。生。取。し。め。ん。もし。生。取。さ。た。る。者。あり。千金。を。與。へ。萬。戶。侯。を。封
 せ。し。李。備。曰。く。一人。あ。て。り。ひ。ひ。じ。う。さ。ら。を。同。謀。の。者。あ。らん。生。取。て。拷。問。を。へ。し。と。て。衣服。襖。襦。をつ。ま。び。ら。り。あ
 槍。を。寫。し。日。夜。を。分。す。州。郡。へ。關。す。い。と。曹操。の。選。手。定。めて。う。ら。ん。と。思。ひ。趙。郡。を。志。して。落。行。ける。が。中。牟。縣。を
 ぞ。ぐる。關。守。を。止。して。曰。く。朝廷。より。曹操。を。捕。へ。よ。關。た。ま。ふ。汝。よく。槍。圖。を。似。り。名。を。聞。ん。と。て。取。せ。さ。け。れ

曹操曰く。我の皇甫の氏あり。今泗州よりこゝ來れり。關守ども。兎角此もの。おまされし。とて。奉行所。あ。つ
 れ。お。ま。され。れ。ば。曹操。曰。く。それ。他。國。のもの。ある。ぞ。本。國。を。し。仕。さ。ま。ふ。も。奉行。す。ける。い。じ。き。都。府。て。先。年。曹操。を。見
 知り。たり。い。ん。や。衣服。も。や。う。盡。く。槍。圖。を。ち。が。り。せ。と。て。車。の上。を。縛。つ。け。さ。ら。ば。明日。都。府。送。り。上。せて。萬。戶。侯。を。封
 せ。ら。せ。千金。を。得。て。諸。人。を。分。ち。與。へ。ん。と。て。酒。宴。を。設。けて。喜。び。を。さ。し。事。お。及。んで。退。散。せ。り。夜。お。入。り。き。ば。奉行。密。り
 曹操。を。引。出。して。曰。く。汝。の。都。府。在。て。重。く。責。任。相。用。ひ。ら。せ。し。と。聞。し。が。あ。む。あ。る。是。の。ご。と。く。ある。曹操。曰。く。
 燕。雀。い。づ。くん。ぞ。鴻。鵠。の。志。を。し。を。知。ん。汝。ぞ。で。お。我。を。生。取。たり。早。く。都。府。送。り。て。恩。賞。を。被。ひ。ば。奉行。笑。て。曰。く。汝。を。せ
 を。輕。ん。ぶ。る。と。あり。れ。我。も。冲天。の。志。を。し。あり。つ。ね。お。志。を。し。を。お。さ。さ。ふ。と。する。もの。あ。さ。を。恨。む。董卓。曰。く。我。の。相。圖。曹
 參。が。後。お。して。四。百。余。年。が。間。漢。の。祿。を。食。へ。り。恩。を。し。ら。る。る。禽。獸。あり。我。さん。を。身。を。屈。て。董卓。お。仕。り。ふ。へ。さ。實。お
 忠。を。盡。して。國。の。爲。お。賊。を。伐。ん。と。思。ひ。し。あ。天。運。い。ま。ま。時。い。ら。せ。あ。ん。ぞ。陸。と。を。せん。奉行。問。て。曰。く。御。邊。今。何。へ。り
 あり。んと。と。る。曹操。曰。く。我。を。故。郷。あり。へ。り。天下。の。諸。侯。を。わ。つ。り。て。義。兵。を。起。し。董卓。を。誅。せん。と。思。し。お。運。つ。きて
 生。取。きた。り。汝。再。び。問。こ。と。あり。れ。奉行。い。そ。ぎ。自ら。其。繩。を。解。席。を。請。じて。酒。を。と。め。再。拜。して。す。ける。い。御。邊。の。さ
 しも。忠。義。の。士。あり。我。ね。が。い。く。い。官。を。棄。て。相。伴。あり。と。も。お。義。兵。を。起。せ。し。曹操。大。い。あ。ろ。こ。び。其。姓名。を。問。へ。ば
 奉行。答。て。曰。く。我。の。陳。宮。字。の。公。盛。と。い。ふ。もの。あり。老。母。妻子。盡。く。東。郡。あり。と。も。お。志。を。し。を。合。せ。衣服。を。代。馬。を
 ぬ。ら。ため。て。路。の。う。ん。と。て。夜。い。ま。た。明。ける。お。二人。うち。つ。れ。日。夜。を。分。す。路。を。い。そ。ぎ。三日。お。成。畢。と。い。ふ。所。まで。い
 たり。そ。で。お。暮。お。及。び。け。き。ば。曹操。曰。く。あれ。ある。林。の。内。お。呂。伯。蒼。と。い。ふ。もの。あり。昔。し。某。が。父。と。兄弟。の。ご。と。く。交
 り。き。り。今。夜。の。この。家。一。宿。して。明日。又。路。を。急。ぐ。ん。陳。宮。を。り。る。べ。し。と。て。二人。馬。より。下。て。彼。宅。お。あ。げ。き。ば。家

主の呂伯者大おおろひて曰く。朝廷繪圖を以て。さびしく汝を尋ふ。是を承ふ故が父も陳留へ逃りくれば。今亦かしてこゝみ来る。曹操くわしく右のことも語りけき。呂伯者をあつち陳留を再拜して。足下若し操を助ぐまひせん。曹氏の二門ごとく。此時又滅ぶべし。ことか言をぞとて。朝敵を誅伐せんとの御志をさしこそあり。がたくいへとて曹操に向てすける。汝よく陳留を持きて休息せしめよ。我の西の村を行て美酒を沽来るべしとて。自ら驢馬に乗て出かけり。曹操の陳留と共に休息して居りしが。夜やふけて家の後より刀を磨きしければ。曹操わやく思ひ。密り陳留の宮をさぐり。此呂伯者の刀がまことの叔父もあらず。今夜自ら酒を沽んとて出るもおぼつり。若我等を捕へて恩賞を望む心もあらん。二人ひそり立聞ると。刀を磨きおは休す。二三人の聲もてをたりてこそせといひければ。曹操が曰く。さてうたがひなし。こゝより斬てり。二人剣を抜てこそ入。男女をさらりせ八人まで切ころし其後厨ころのうたひら生たる猪をつぎをさぐりし。陳留のあひだ後悔して曰く。是猪をころして我等をもてあざんぬりあるを。曹操卒爾科科人を殺せり。曹操が曰く。悔る共及べし。早く馬に乗て逃去ん。さぐりせぬまへとて。飛がごとく二里をうり逃げければ。向より呂伯者驢馬うち乗。酒樽二つ鉄つつけ。手も菓の持てりへり来る。二人の走るを見てあまの。早回りすまふ。我を以て一匹の猪を用意せり。平一宿しなまへとて呼りければ。曹操若て片時も急ぐ路もていと云とて。馬も鞭打て走りける。吃と必づいて取て返し呂伯者を呼で馬より引下し。一刀も胸板を突とふ。陳留をこころひて曰く。知でころそ。是非もなし。今亦もあま呂伯者を殺せる。曹操が曰く。この人あまよりへりて。妻子の殺されたるを見。我をよもたむ置べらう。陳留が曰く。まうら。罪なきをぞ知てころそ。不義なり。曹操が曰く。軍我をして天下の人へ走てゆへ。

負うしむとも。天下の人をして我を負しむるとを休よと云ければ。陳留黙然として。ものをもさ。曹操が一言の内。ついに天下を奪はんと思ふ心ありければ。千載の後までもこの言を聞て。曹操を疾ますとらふものなし。その夜の光も路を求めて。五六里をうり落のさ。うたぐらある家も宿し。馬より下りて休みければ。曹操のこの間の疲もや。前後もえらす寐入らり。陳留心も思ひける。我とじめ曹操を天下の忠臣なりと見て。言をぞとて。押さきたりし。元來この人も狼鹿の野心をさしはさむ不義人あり。今日もし殺せん。殺まらう。天下の禍ひをささん。まうす今刺ころさんとて。剣を抜て立よりける。さや。曹操が曰く。押さひ来れる。天下を正さん。今これを殺す。不義なるべしとて。又剣を鞘に収め。夜はまた明なる。馬をことして東郡へ落めかけり。曹操をひめて陳留を尋ねれども見へざりければ。扱ひ我が不義を疾んでぞとて。急も馬より乗。夜を日ついで陳留へ走てゆへ。

○曹操起兵伐董卓

曹操とては陳留へ下着して。父を尋て對面し。事のやうをわりのまへと語りて。義兵を發さんと請しければ。父曹操が曰く。我が家も貯りへたる物なれば。大儀の計略もあひつかし。此ところ。衛弘といふものあり。家あくまで富榮て。固より忠義の志をさしふる。この人を語らひ。共大儀を思立べし。曹操即ち酒宴を設けて。衛弘を請じ。再拜してやける。董卓いまだ逆威をよる。天子を廢して民を害と。某忠を盡てし。再び天下を治めんと存せれども。力足せして大儀を思ひ立とわらす。足下の元來忠義の心より。丈夫あるを知て。是を承ふ告す。ありと云ければ。衛弘が曰く。され久く義兵を興さんと思へども。力を協とべき人なきを恨む。御邊をこころ忠義の心あらば。我が家

財を以て助くべし。曹操大いよるこび先詔のりを受たりと号して。四方は觸をまひし。與力の兵を催し。白旗を
 つくりて忠義の二字を書つけしう。次の日より。さたり集まるもの雨のごとし。一人そゝみ出で。某の衛國の人よ
 樂進字の文謙といふもの。こねがひくとも。董卓を伐んと云ければ。即ち用て帳前の吏と。又兄弟二人夏侯惇
 字の元讓。夏侯淵字の妙才といふもの。沛國譙郡の人あり。屈強の兵三千余騎。元來曹操が父曹嵩の。
 夏侯氏の子たりしが。曹氏を養ひて姓を改ふ。今この二人もみちらうき一族ありしう。共み心中の計ごと
 と議と。数日とぎて。曹操が兄弟曹仁字の子孝。曹洪字の子廉。千余騎を引て來り加ひる。曹操是より毎日軍馬を調
 練とる。又一人給を提げて出來り。將軍は從つて逆臣を誅せんと云ければ。其名を問ふ。山陶鉅鹿の人。李典
 字の曼成と。昔曹操衛弘大いよるこび。家財を惜まざ。大刀。薙刀。甲盔の類を造り。一齊とそみりければ。五千
 余騎の兵を調へて。陳留は陣を取。おは國の勢を待。これを見て。金銀を送り兵糧を運んで。忠義を扶るものも多
 うりけり。この時袁紹の渤海郡ありて。曹操が義兵を興とよしを聞。公。麾下の大將をわつめ。兵を集むる計ごと
 を議しける。年比の大將。田豐。沮授。許攸。審配。郭圖。顏良。文醜。あんどいふものども。みち忠義の志ざしをは
 けまし。即時に三万余騎を起し。曹操を力と協せんとて。夜を日と繼ぐとせのぼる。曹操が諸國へ觸たる檄文は曰く
 操等謹以大義。布告天下。董卓欺天罔地。滅國弑君。亂宮禁。殘害生靈。狼戾不仁。罪
 惡充積。今奉天子密詔。大集義兵。欲掃清華夏。勳戮群凶。冀興仁義之師。來赴忠烈之
 會。扶王室。極救黎民。檄文到日。速可二軍行。
 是を見て國の諸侯兵を起と人よ。



曹操
 檄文
 應
 諸侯
 共

- 第一 鎮後將軍南陽の太守袁術字の公路
- 第二 鎮冀州の刺史韓馥字の元節
- 第三 鎮豫州の刺史公祐字の孔楮
- 第四 鎮袁州の刺史劉岱字の公山
- 第五 鎮河内郡の太守王匡字の公節
- 第六 鎮陳留の太守張邈字の孟章
- 第七 鎮東郡の太守喬瑁字の元偉
- 第八 鎮山陽の太守袁遺字の伯業
- 第九 鎮濟北の相鮑信字の允誠
- 第十 鎮北海の太守孔融字の文舉
- 第十一 鎮廣陵の太守張超字の孟高
- 第十二 鎮徐州の刺史陶謙字の恭祖
- 第十三 鎮西涼の太守馬騰字の壽成
- 第十四 鎮北平の太守公孫瓚字の伯圭
- 第十五 鎮上黨の太守張楊字の稚叔
- 第十六 鎮烏程侯長沙の太守孫堅字の文臺

第十七 筑前縣侯海防の太守袁紹字の本初

右の人、其勢或の二万。或の三万。思ふは洛陽を以てとせのぼる。中も北平の太守。督武將軍公孫瓚の一万五千。余騎もてとせのぼり。德州平原縣を通る所。一村しげりたる桑の木のの中より責ある旗をたしたる。兵士ども。四五騎がはどけ出ちりりありて。盡く馬より下りければ。よく見ると劉玄德あり。なみとてこゝに居るまふと。問ふ玄德の曰く。某黃巾の賊を平らげたる勳賞。平原の縣令とされり。とて。ひりて城中へ入れ。まをく人馬の足を休。公孫瓚問てやける。是る二人のいりある人ぞ。玄德の曰く。これの關羽張飛とて。某が弟もて。公孫瓚が曰く。うの黃巾の賊を破りたる人。今いりある官職あり。玄德の曰く。關羽の馬弓手。張飛の歩弓手あり。公孫瓚が曰く。惜り。大丈夫をうづめ。今董卓を討して天下の諸侯これを誅せん。御邊この微職をせ。一同は逆臣を討つ。是は大いある忠義ある。玄德の曰く。これ願くは行て忠を盡さん。張飛が曰く。よ。某が董卓を殺さんと云し時。もし止めまらん。今日の乱の出来。關羽が曰く。無用のといひまひ。早く支度あるべし。用意一々を備けりければ。玄德五六騎を引て公孫瓚と共うち立ちまふ。うくて十八ヶ國の諸侯。盡く會合して。うけあらべる。陳の二百余里。數十万の兵もの。尺地ものこすみちりたり。曹操大い。よろこび。牛を鞭馬を殺して。計ごとを議しければ。太守王匡が曰く。今も義兵を起して。逆賊を伐んと。よろしく盟主を立て。物軍の首將とし。其後よ。諸人の義まうるべし。とて。離彼と相めぐりければ。曹操が曰く。袁紹の四代まで三公。昇り。門下は故吏多く。漢の名將の後胤され。よろしく。盟主と定むべし。袁紹再三辭退しけれども。諸人みち一同よ。めければ。辭するは詞なく。次の日三軍は壇を築き。五方の旗をたて。上より白

旄黃鉞兵符印綬をつらね。袁紹衣冠をど。のへ。劍を帯て壇ののぼり。香をたき再拜して誓て曰く

漢室不幸。皇綱失統。賊臣董卓乘機。從害禍加。至尊辱流。百姓大懼。下論二喪。社稷一剪。覆四海。紹等糾合義兵。並赴國難。凡我同盟。齊心戮力。以致二臣。節殞首喪。元必無二。心一有。此盟傳。其命無克。遺育皇天后土。祖宗明靈。實曾鑒之。

盟ひをいりて血をど。諸將及び國の軍勢までも。慷慨して涙をながし。齒をくひしをりて。踊りあがり。逆臣を討んと勇と。其後袁紹壇を下り。大將の座を着ければ。國の諸侯みる禮をほとして次第は列坐。酒宴數刻も及んで袁紹やける。吾諸人を懸心おし。汝等を以て盟主とす。功あるものりあらず。賞し。罪あるものりあらず。罪せん。國は常刑あり。軍は紀律あり。各々つゝ。まんで怒るとあり。兄弟の衰術あり。兵糧を奉行して諸大將は分つべし。離り又先手よ。んで汜水關を攻やぶらん。長沙の太守孫堅が曰く。某不才も。願くは先鋒たらん。袁紹が曰く。御邊の勇烈。まこと先手の職。當るべし。とて。盃をそめて祝しければ。孫堅まづ。手勢を引て汜水關を殺奔。關を守ものども。急ぎこのよしを相府に注進しければ。曹操も。幸儒とる。董卓も。見へて曰く。天下の諸侯の曹操より。兵を興して汜水關を攻り。早く討手を向せ。敵は難所をこへられ。あま由し。大事もていけん。此時董卓の酒色よ。おぼれて居たりしが。大いよ。かどろひて。いりせんと。諸侯の首を。一討とりて大地よ。あふべん。是呂布が願ひもて。早く兵を率して打向けん。董卓よろこんで曰く。呂布が。ふんうざり。枕を高して安臥をべし。時一人をみ出。鎌を割。いづくんぞ。牛の刀を用ん。この度の軍よ。

呂布を用ひしまでもあし。某罷り向て國の諸侯の首をとると。遂にやうりて物ごとく出でんとくさふんと
 呼はりければ。諸人これを見るも。身の長九尺あまりある男の。一荒われて。面は血をそそぎたるがごとく。虎体。狼
 腰。豹頭。猿臂。關西の人。華雄といへる狂將あり。董卓大いよろこび。好くもやたりとて。驍騎校尉に封じて。五
 万の勢を授け。李肅胡軫趙岑を副將とし。行て汜水關を守らしむ。此よし袁紹が方へ聞へければ。濟北の將鮑信とい
 ふもの。密に弟の鮑忠を呼んで申ける。長沙の太守孫堅。ぞで先手を望ぬるうへ。我等いつも後陣ありて
 功名するところへくさ。汝小路をまはりて汜水關をぬしよせ。一攻せめて敵をこころみよと云ければ。鮑忠三千
 余騎を率して。ひそく小路よりぬしよせ。賊の聲をぬるはとこそわび。抜つれて攻上りければ。今暮りの華雄が
 勢。すいや敵こそよせぬる。いひもめへす五百余騎。響をさふべて。真地暗に切て下す。鮑忠が三千余騎。眞倒
 まりうけ。落され。散らふりて走りければ。華雄馬を飛して追うけ。鮑忠を一刀に斬て落し。首を取て洛陽へ上せ
 ければ。董卓甚だよろこび。又千余騎をさして。へて重く恩賞と與へ。關の前陣を取て。出で戦ふとさうらしむ。長
 沙の太守孫堅。鮑忠がぬけがけして討れたるともさふす。程普。黃蓋。韓當。祖茂四人の大將を従がへ。汜水關を
 しよせ。逆臣を扶くる匹夫。おんを早く降らざると呼はりければ。華雄が副將。胡軫これを見て討て出。孫堅が首を
 取んと望みければ。華雄即ち五千余騎を分たふ。胡軫先馬を出し。關を下りて向けければ。孫堅自ら戦はんとな
 る。程普を舞して討て出。戦ひ二三合あして胡軫喉と突とはされ。馬より落て死しければ。孫堅勢ひも乘て。汜
 水關をうちやぶらんと。逃る敵も追すがつて攻り入りける。華雄兵を下知して雨のふるがごとく射させければ。孫
 堅も兵を収めて。梁東陣をとり。胡軫が首を袁紹が本陣へ送り。袁術も告て。兵糧を求む。ある人孫堅を恨むると



ありて。袁術は私語ける。孫堅は江東の猛虎あり。若
 洛陽を破て。董卓をころしる。うあふ走又禍ひをささん
 これ頼めをのぞひて虎と得るさうなり。今兵糧よつす
 かせて。みづうら乱れ散やうよまへへと諭言しければ
 袁術げもと思ひ。ついに兵糧をわたへりけり。これよ
 因て孫堅が陣より。兵糧よとさうして。軍中をのづうら乱
 れ疲れ。急りて居たりし。華雄が勢この体を見て。急
 り李肅を報せ。李肅聞て華雄は向て曰く。これ一軍を引て
 小路をまはり。孫堅が陣の後をせむべし。御邊の夜半の比
 關前よりぬしよせぬ。孫堅もさうさ論とさふら。華
 雄よろこんで。その夜のあり。月よとよわらうありけ
 れ。敵をうち賊をつくつて真地暗に斬て下る孫堅大いよ
 おどろき兵を下知して戦ふ所。後より李肅が勢走り
 ちりて。火をうければ。孫堅が勢。前後も度を失ふ。こ
 とさら飢つりれて弓をもちりたりしく引得せ。火の中烟
 りの内ともいとも上を下と騒動。孫堅とらうらと逃

れ出馬をうつて走りければ。程昔。黄蓋等もけ隔てられて。祖茂一人相従ぐへり。後より華雄兵を驅て飛ぐごとく追りけす。近くなりければ。孫堅取て回して十合あまり戦ひ。又馬を打て走りける。華雄ついで追ければ。孫堅弓矢をばげ。引くへして二筋まで放ちける。みちあふらさず。第三の矢をつがひあまり。強引て弓二を折れば。射のこしたる矢をうきりす。林の内へ逃入ける。祖茂走つひてやける。君の着たまへる蓋のたるし。甚くあつくして人の目よりいひゆる。華雄いづくまでも追りけし。早くぬいで某あへへまへ。孫堅げよもて。馬上より祖茂が蓋と取りへ。左右より走られて走りければ。案のごとく朱蓋を着たるものが東へ走るを見て。華雄兵を下知して。とぶがごとくよみいりくる。祖茂今は是までありと思ひ着る。蓋をぬいで。うたひらざる。在家の焚燬りたる柱の立るよりけ置。身をひそめて。大木の後よりくれければ。追手の兵もの月うげみあうき印しを。見て初めのはどの雨のふるごとく。矢を放ちける。まばらくなりて。これの人よていささぞ。孫堅のがすす討とれと。驚くよ呼り。華雄馬をとをして林の内へ尋ね入る。祖茂の大木の陰よりくれ華雄が來を見て。不意に討んとしける。華雄急度見つけて。雷ちの落りくるごとく喚ひてか。一刀は祖茂を斬。その首を取てまづくと引くへす。孫堅この間よりうらふらふ命を扶けり。敗軍をみつめける。討れざるもの數をえらさ。ことと祖茂が命よりりて。討死をたるを見て。まじり涙をみかして。おげき悲しむ。袁紹の本陣は在て。此注進をさ。今孫堅大い破れて。そのまよて外あふら。敵うさらす勝に乗て討て出へし。早く陣をまりどりしめよとて人を馳て呼りへし。國々の諸侯をみつめて。やけるが。鮑將軍の弟ぬけかけして其身も討れ。若干の軍馬をうまきひ。今又孫堅大い破れて。味方みき氣を隕す。いりすべしといひければ。一人も言をを出すものなし。袁紹のまねく坐中を見る。公

孫堅が後より立る。三人其貌ち尋常ならず。冷笑て居たりければ。即ち問て曰く。公孫太守後より立たる。何人ぞ。公孫瓚答て曰く。これ其幼きより同窓の朋友よ。平原の令。劉備字の玄德よ。曹操が曰く。黃巾の賊を破し人。公孫瓚が曰く。まじり袁紹が曰く。玄德の漢室の宗親あり。坐をあたへよ。玄德辟して曰く。某の小縣の令あり。いづくんを坐をとるとを得ん。袁紹が曰く。これ御邊の名爵をうやまふよ。あらせ。もと帝室の宗親よして。國のためよ功多き。さうやまふあり。玄德拜謝して末坐よ着たまへ。關羽張飛そのうしろよ立。まばらくなりて。斥侯の人きたり。華雄兵を引ておしよせ。おがさ。華雄の朱蓋をさしおげ。ごま。一馬りいど告ければ。袁紹が曰く。たれり。行て此敵をやぶらん。忽ち袁術が後より。武勇の譽とりたる。俞涉といへる大將を。み出某願くば。もうんとて。兵を引てうつて出。戦ひ三合あふら。華雄一刀は斬ておとされたり。敗軍走りうへりて。其よしを告ければ。一座の諸侯大いおどろく。時よ太守韓馥が曰く。我一人の名將。潘鳳といふものあり。華雄をたやとく討取るべし。袁紹よろこんで。それよべといひければ。潘鳳聲よ應じて。手よ大いある斧を提さげ。馬を飛して出よける。まばらくなりて。人きたり。潘鳳も一刀は斬れたり。告ければ。滿坐興を醒して色を失ふ。袁紹股を拍て嘆じて曰く。おしひ。うあわが。大將の顔良。文醜二人の勢をもよふして。いま來らす。若一人ありとも。よあふら。華雄を討んと。手の内よあり。國々の諸侯多くの大將ありといふとも。華雄は敵とる大將一人もなし。天下のあざけり。後代の羞さらすや。といひければ。一座黙然として答るものなし。時よ階下より一人進みて出て。某ねがひ。華雄が首をととりて。献まつふんと。呼り其聲鐘のひびくごとくありければ。諸人おどろひて。これを見る。其人身の長九尺五寸。髯の長さ一尺八寸。丹鳳の眼。鳳の眉。面は重棗のごとくあり。袁紹問て曰く。これい。ある。公孫瓚答て曰く。これの玄

徳の弟の關羽といふものなり。袁紹が曰く。いづる官職あり。公孫瓚が曰く。玄德に従つて。馬弓手あり。袁術これを聞て大い怒り。汝の國の諸侯は大将を侮る。馬弓手の分として。争うす。み出て舌を割と。よれやものども此曲ものを乱棒より出せと罵りければ。曹操急を諫めて曰く。まをらる怒りを止まへ。この人ぞ大言を吐出せる。うへに定て其身の覺わらん。こゝろみよ出向しめ。もし勝せん罪を正しませ。袁紹が曰く。馬弓手とてを出して戦しめ。うさらず華雄は笑れん。曹操が曰く。この人の体よのつねなむ。華雄も馬弓手といふもふまじ。關羽が曰く。某もし華雄が首をとらせん。うさらず軍法を行ひませ。曹操が曰く。こや敵も近付さ。この酒を呑で戦へ。あたためる酒をあへければ。關羽ける。先華雄が首をとり來りて。此酒を飲べし。とて。八十二斤の青龍刀を提さげ。馬を飛して。とせてゆく。國の諸侯この勝負い。と危ふむ所。とる。又鼓のこえ。天地をひらうし。山川動搖しければ。諸人み色をうまふ。關羽の馬を飛して。そこし。ため。少い。敵の大勢を八方に追散し。猛虎の千羊の群。入がごとく。直ち中軍より入て。た。一刀。華雄を斬て。落し。首を取て引へ。と。數万の敵軍。その威風を。とせて近付ものぞありける。關羽ま。と本陣よりへり。華雄が首を坐の真中より出。と。さの酒を飲ける。其酒は。あた。のあり。國の諸侯大い。よ。こ。び。一度。よ。こ。を。あ。げ。て。の。め。さ。け。れ。ば。忽ち玄德の後より。長八尺のりの男。虎鬚み。さ。の。さ。ま。よ。た。て。眼の光り星の。と。く。さ。る。が。雷。ち。の。こ。と。と。聲。よ。て。叫。んで。曰。く。關。羽。ぞ。で。華。雄。を。斬。り。ま。へ。り。此。と。き。も。乘。て。洛。中。に。攻。入。董。卓。を。生。取。せ。ん。と。い。づ。れ。の。時。を。の。期。せ。ま。さ。と。て。一。丈。八。尺。の。蛇。矛。を。提。さ。げ。馬。を。乘。て。出。んと。す。諸。人。こ。れ。を。見。れ。ば。張。飛。も。袁。術。大。い。怒。て。曰。く。國。の。諸。侯。高。官。の。名。將。も。自。ら。讓。り。て。口。を。縛。る。汝。等。縣。令。の。手。下。に。居。て。争。う。は。る。と。あ。る。べ。き。



追立てうち出せと。罵りければ。曹操諫て曰く。そで。功。あ。ら。ば。恩。賞。す。べ。し。か。ん。ぞ。貴。賤。の。別。あ。ら。ん。袁。術。が。曰。く。も。し。こ。の。奴。原。を。用。ひ。ま。り。と。我。の。の。さ。ら。ず。本。國。に。回。る。べ。し。曹。操。が。曰。く。争。の。一。言。よ。り。て。是。は。ど。の。大。事。を。廢。と。べ。けん。や。と。て。ひ。そ。の。よ。公。孫。瓚。を。告。て。玄。徳。關。羽。張。飛。を。伴。あ。ふ。て。退。の。し。め。其。後。國。の。諸。侯。か。の。く。陣。中。に。の。へ。り。け。れ。ば。曹。操。ひ。そ。の。よ。玄。徳。の。方。へ。酒。肴。を。送。り。て。そ。の。怒。を。慰。め。身。を。去。は。と。ま。華。雄。を。で。討。れて。敗。軍。盡。々。と。汜。水。關。に。逃。の。へ。り。け。れ。ば。李。肅。大。い。よ。か。ど。ろ。き。早。馬。を。つ。て。洛。陽。へ。急。を。告。ぐ。董。卓。以。て。の。は。の。よ。仰。天。し。李。儒。を。め。り。て。計。こ。と。を。評。定。せ。る。よ。李。儒。が。け。る。の。今。味。方。大。將。を。討。れて。許。手。い。よ。一。勢。ひ。よ。の。る。是。皆。袁。紹。を。盟。主。と。して。諸。方。の。惡。黨。を。あ。つ。ひ。る。が。あ。る。若。内。應。さ。ん。と。せ。ば。由。々。し。き。大。事。あり。ま。の。し。ま。つ。こ。れ。を。除。て。後。丞。相。自。ら。御。馬。を。出。し。ま。り。逆。徒。の。退。治。

○呂布 大戰三虎 半關

雖をめぐらざれば。董卓大いよるこび。李儋。郭汜。五百余騎を授け。太傅袁隗の家を圍んで。男女一人ものこぼせ
 切殺せ。其後二十万の勢を分ちて。一手は李儋。郭汜を大将として。其勢五万余騎。汜水の關を堅め
 て出て戦ふとす。もう一方は。一手は董卓自ら十五万の勢を率して。李儋。郭汜。張濟。樊稠等を従ぐ。虎牢關を固め
 る。この關は洛陽を去る五十里にして。若兵をそへむる時。國の諸侯の通路を塞ぐ。第一の要害なれば。呂布も
 三方の精兵をつけて。關より外は陣をとらしむ。この由傳て袁紹が陣を聞へければ。急ぎ國の諸侯をわづめて討
 ごとを議する。袁紹曰く。董卓自ら虎牢關を堅く守て。味方の諸侯の通路をふさぐ。味方も二手に分てこれを攻
 べし。袁紹さうするべしとて。王匡。鮑信。喬瑁。袁遺。孔融。張揚。陶謙。公孫瓚。八ヶ國の諸侯を分て。虎牢關を守らしめ
 曹操を遊兵とあして。關のふん方をすくひしむ。八ヶ國の諸侯兵を引てあしませ。一番は。河内の太守王匡をあへを
 立て進ければ。呂布これを見て。たうち三万余騎を引て出む。王匡馬をとりめて敵の陣を見たせ。呂布真先
 めぞみ出。三叉の東。紫金冠をいひ。朱地の錦の百花袍を着て。連環の鎧をのばね。獅子皮の帯。弓筒を
 け。手は青桿の方天戟をとり。無双の名馬赤兔とらへる。もう一騎。往來馳騁するあり。さうさうのつねのもの
 と見へ。呂布の武士の中。第一赤兔の馬の中。第一あれば。世の人の口をさみ。人中の呂布。馬中の赤
 兔と云けるも。理りありと覺り。呂布の奇手の大勢も。これ氣を吞れて。そまんとするものさうりければ。王
 匡。左右をのへりみて。離れ出て戦はんといひける。河内の狂將。方悅といふもの。鎧を提げてうけ出。二三合戦
 らふと見し。呂布馬より斬て落さる。王匡大い怖れ馬をうへして走りければ。呂布勢いも乘て追うけ。左は突
 右は突。大勢の中を斬てまひりければ。奇手の勢討るもの。敵をしらす。王匡とてあやうく見へければ。喬瑁袁遺

が二手の勢。一度おのりて防ぎ戦ひ。王匡をそくひ出す。呂布の大い打撃。長追させとて。ぎつくと本陣
 におへる。奇手の敗軍を収めて三十里走り去る。呂布が英雄敵すべきものさし。いらいせんと闘するところ。斥候
 の兵走りきたり。呂布又兵を引て。此所へをしよすると告げれば。諸人大いあどろろ。急ぎ岡の上のぼりて望み
 見る。呂布が一軍虎狼のごとく。錦の旗をひらめかし進み来て討てかへる。上黨の太守張揚が内。程順とて名を得
 る。大将あり。呂布が來を見て。鎧を提げて馬を出し。只一合あして馬より下へ斬ておとされければ。八ヶ國の諸
 侯みち。膽をひやす。又北海の太守孔融が内。武安國といへる。某太守の恩を受と十年
 あわまれり。呂布が首をととりて。忠を致さんとて。重さ五十斤お遣りする。鉄の鎧。五尺あま。柄をつけて。輕げ
 み打ふり。馬をととして出ければ。呂布これを見て。やむしくも見ゆる敵のあて。戦を舞ひして十合あまり戦ふと
 見へし。武安國。腕を斬りてとされ。彼鎧を地におき。馬をうつて走りたれ。八ヶ國の諸侯相驚りあひりて
 武安國をそくひのへる。袁紹此よしきひて。いらいせんと闘しければ。曹操曰く。呂布が英雄。天下の敵なし。十八
 ヶ國の諸侯を一手あし。一齊あひりて呂布を生取らまへ。呂布もし誅せられ。董卓自ら。漢をへし。ごき。早
 馬さうり。呂布又兵を引て。おしよせたりと告げれば。袁紹急ぎ。八人の諸侯を命じて防がしむ。呂布直ち公孫瓚が
 陣を討てのりければ。公孫瓚をまひりして戦ひんとする。呂布眼をいらし。喚ひてのりければ。公孫瓚。陣を
 ひやして。一支も支ぞ。馬をうつて走りける。呂布急ぎ追きたる。呂布が乗る赤兔馬。一日お千里を走り。其疾
 と猛風のごとくあれ。ごき。追付んとしける。一人の大將。大の眼をいらし。虎鬚みさ。ごき。あわぐり
 て。丈八の矛を舞し。真横をまひりけ出。呂布走るとさうれ。燕人張飛。こゝあわりとよ。へりければ。呂布さつと見て

關羽華雄首
取て本陣
回る



公孫瓚をうちすて。張飛と時うつるまでせめ戦う。國の諸侯張飛が給のまたひ乱るを見て。心の内わやぶるところ。張飛心をとげまし一聲大いお喚きければ。關羽これを見て。今こそくわんせん。かあふまじとおもひ。八十二斤の青龍刀を打ふり。馬を飛して討てかゝる。呂布これおもおそれ。關羽張飛と又三十余合戦ひければ。玄德これを見て。左右の手も劍を提さげ。馬をまじへて兄弟三人呂布をとりまさ。火をちかして戦ひければ。國の諸侯これを見て。心み酒を酔たるがごとし。呂布いよく氣を屬まし戦をさしのべ。玄德の面を突んとまたることを關羽張飛とままもさく切つけし。呂布のさうじとや思ひけん馬をのへして引退ぞく。玄德勢はひみ乗て追のけし。國の諸侯相が。りお攻のり。賊の聲大いお震ふ。呂布が勢大半討れて虎牢關へ逃入ければ。關羽張飛關門の前まで。おしよせて。遙か向を望め。青龍の傘蓋。風おまたがつて動搖す。張飛大いお音をあげ。あ

れなる。董卓と見ゆる。呂布を退て手柄をわらひしたり。董卓を生取をこれとさうち草を斬て根をのぞくあり。ついでや人として馬をうつて登らんとする。橋の上より大石をさげかけ。射かると矢雨のごとくありし。張飛のぼるべきやうなく。齒を切し。城を睡んでいづらふ立たりける。此を畫傳虎牢關の三戰と云

董卓 長樂宮

呂布打負て逃入るよし。本陣へ聞ければ。袁紹大いよろこび。檄文を以て孫堅を命じ。兵を引て攻りし。孫堅命を受けて。自りう程。黃蓋等を伴ひ。袁術が陣へ行て。對面し。誓をさしてすける。これ董卓ともより誓さし。今兵を興して。自りう矢石を。同じ。命を。しす。戦を。さげ。む。もの。上。の。國。家。の。さ。り。も。忠。を。盡。し。下。の。百。姓。の。苦。し。み。を。ぞ。く。の。ん。が。為。さ。り。然。る。も。足。下。の。人。の。議。を。信。じて。兵。糧。を。送。ら。ず。某。の。敗。軍。を。せ。ら。ま。ふ。の。い。う。る。も。あ。ぞ。と。責。め。られ。ば。袁。術。の。さ。う。へ。の。首。さ。く。大。に。怖。れ。て。さ。う。さ。は。謀。首。した。る。もの。を。引。出。し。其。首。を。斬。り。謝。し。け。れ。ば。孫。堅。これ。も。必。足。て。酒。宴。を。さ。し。て。居。た。る。所。も。手。下。の。兵。もの。走。り。さ。たり。虎。牢。關。より。騎。馬。の。客。二。人。さ。たり。孫。將。軍。も。あ。い。んと。す。は。と。告。げ。れ。ば。孫。堅。さ。う。さ。り。袁。術。も。別。れ。て。我。陣。へ。回。り。何。人。と。も。問。は。ず。さ。り。ち。董卓。が。大。將。も。李。傕。と。い。ふ。もの。あり。と。こ。の。孫。堅。呼。よ。せ。て。問。て。曰。く。汝。さ。う。と。て。こ。の。よ。來。れる。李。傕。が。曰。く。丞相。董卓。常。に。將。軍。の。德。を。望。み。今。某。を。以。て。使。と。して。さ。ぐ。く。好。を。結。む。し。び。董卓。幸。ひ。一。人。の。女。あり。將。軍。の。子。を。婿。と。して。一。門。の。子。弟。盡。く。郡。守。刺。史。も。封。せ。べ。し。孫。堅。大。い。怒。て。曰。く。董卓。天。を。逆。ひ。道。を。背。き。君。を。殺。して。惡。を。さ。す。我。つ。ね。も。其。九。族。を。滅。して。首。を。さ。り。都。の。門。へ。懸。て。天。下。の。人。を。驚。せ。んと。欲。と。若。さ。う。ら。さ。る。時。の。我。死。と。も。目。を。蓋。さ。じ。安。ん。を。進。徒。と。好。を。結。む。ん。や。い。ま。汝。が。頭。を。斬。べ。け。れ。ど。も。暫。ら。く。預。け。お。く。早。く。回。り。て。降。人。へ。出。よ。若。お。と。さ。り。ら。ば。徹。底。も。さ。ら。んと。て。退。立。出。し。け

をすて、回りきたれと下知しければ、大將趙雲、諸所の兵を引拂ひ關をすて、走りける。國の諸侯是を見て、ど
 いや敢てそ落たきとて、取ものもとりあへず。可きさまよと込入。汜水關へは孫堅一番、馳入。虎牢關へは龔德一番
 よとせ上り。國の軍勢、相つひて乱入。孫堅の馬を飛して、洛中を望む。火焰天をこかし、黒烟り地を包み。三
 百余里が間さしも、繁華ありし洛陽城、片時がわひびび、灰燼とありければ、さるる涙をながしてあさましく思ひ。
 兵を下知して火を滅させ。國の諸侯のみを燒跡、陣を取て居たりける曹操、自りう、袁紹を見てやける。今董
 卓西國をさして落下きり早く勢ひを棄て追うけつゝ、さるる涙をながして居る。袁紹が曰く、
 方諸國の勢とくくつゝるをば、追うくるとも益あるまじ。まづ二三日人馬を休めて、其後、沙汰をべし。曹操が曰
 く、董卓洛陽を燒つくし、天子を奪て長安を走る。四海ふるひ動いて、版籍る所をしらす。是天董卓を滅し、さるる
 り。一戦して天下太平からん。早く追討より、りさへ。諸國の太守みも疑をふくんで、追うけんといふものさく。
 默然として居たりければ、曹操大いに立腹し、堅子どもを謀るも足す。云甲斐なき人々と。此大事を計りけるこそ越
 度され。よし、人の兎も角もわれとて、どが陣を馳りへり。夏侯淵、曹仁、曹洪等、一万余騎を率し、董卓を討止め
 んどて、跡を追てぞ馳りける。去程、董卓洛陽を落て帝の御車をとやめ、長安をさして急ぐ所よ。樂陽の太守徐
 榮と云もの、兵を引て出むりひ。再拜して見へけき。董卓よりこんで重く責す。李儒が曰く、某さるる追手の勢。
 跡を棄て来るべし。先徐榮が新手を。樂陽城の傍ある。山の後、伏おき。若追りくる敵あらば、其のさるるを待
 て、跡を棄せ前後より打やぶるべし。董卓尤もとて、徐榮を討ごとと授けて、山の間よりうく藏し。呂布は精兵を
 付てさるる引さぐりて後陣を打せ。御車を守護して徐榮を落めさけり。案のごとく、曹操が一万余騎、飛がごとく



又西の方より賊を咆とつくりて、董卓が大将、郭汜兵を引て打て出ければ、曹操又曹仁と命て防しむ。兩方の軍
 勢たぐひも命を惜む。矢叫びのこゑ天よりひびき。入みだきて攻戦ひける。夏侯惇つひも呂布と打まけ。さん
 走りけき。呂布兵を驅て短兵急追のけ。首と斬と殺をまらす。曹操が一万余騎、心を一つよして戦ひふといへ
 とも、敵の狂勢よりちやふられて、深陽をさして北ける。殘る勢四千人、いれとさざりけりされとも、敵長追をもせ

追うけしり。呂布こきを見て大い笑

され。李儒が計ごとく、董卓を討りけり

て、兵を留めて陣勢を張けき。曹操自り

馬を出し、大音わけてやける。逆賊董卓天

子を却りし何へり行く。早く此とこ

りへさせん。一人も遣させ打止めん。呂布

むらひ主よそむく匹夫ら。ちうくより

て首を失ふ。曹操が勢

の中より、夏侯惇をひねりて突てのり。

呂布と火をちらして戦ひ所よ。董卓が大

將、李儒を一軍引て横合よりそむ。曹操

こきを見て夏侯惇を命じて戦ひしむる所

勢たぐひも命を惜む。矢叫びのこゑ天よりひびき。入みだきて攻戦ひける。夏侯惇つひも呂布と打まけ。さん

走りけき。呂布兵を驅て短兵急追のけ。首と斬と殺をまらす。曹操が一万余騎、心を一つよして戦ひふといへ

とも、敵の狂勢よりちやふられて、深陽をさして北ける。殘る勢四千人、いれとさざりけりされとも、敵長追をもせ

ざりしなり。あまたる山の傍より下居て。人馬の息を休め。兵糧をつらんとするところ。夜の三更のころ。月の光白日のごとく。よして山の四面。賊のこゑをあげ。徐榮が伏勢と。くおこりければ。曹操魂を失ひ。馬に乗てとしりけるを。徐榮急を追うけ。よつ抜て兵と射る。其矢曹操が肩より中りし。矢をぬくべき日間もなく。一命を助らんを馬をうつて。鞍の中を走る。徐榮が歩立の兵。帥のうげ。まぢうけ。馬の太腹を二鎗突て。眞らうのまは。駈おとさせ。二人ひしと。馳より。すで。首をせらんとする。曹操が弟の曹洪。月影をこき。見付て。どぶぶごとく。馳せり。二人の敵をさき。こゝろして。馬よりと。び下り。曹操をた。せ。け。おこしける。肩を射られたる。矢の落重くして。馬よりおちたる。時勢をふま。せし。なり。そ。で。人。心。地。も。お。く。な。り。ま。け。り。曹洪大い。ま。お。ご。ろ。ひ。て。ま。う。く。ま。る。間。ひ。曹探。こ。し。思。出。て。す。け。る。つ。我。ぞ。で。お。操。手。を。負。し。ま。た。こ。の。所。か。て。亡。ぶ。ふ。し。汝。り。早。く。お。ち。の。び。て。生。殘。ま。と。云。け。れ。曹洪。曰。く。お。み。ま。て。甲。斐。ま。さ。ご。と。仰。せ。ひ。ぞ。早。く。某。し。が。馬。を。乘。ま。す。入。曹探。曰。く。敵。ぞ。で。お。ち。の。び。つ。ひ。お。ち。ふ。ん。と。汝。若。馬。を。さ。き。ま。さ。し。つ。して。逃。る。と。得。ん。我。ぞ。う。ち。ま。て。早。く。お。落。お。け。曹洪。す。け。る。つ。夜。さ。ら。へ。ふ。け。て。追。つ。く。る。敵。も。あ。し。か。は。と。ま。云。ぶ。ひ。る。ま。御。心。ま。て。ま。ま。と。て。天。下。の。大。事。を。思。召。し。た。ち。ら。る。ぞ。曹探。曰。く。さ。う。ん。せ。ん。我。し。ま。り。又。昏。迷。し。て。う。ご。く。と。あ。ら。ま。し。曹洪。曰。く。さ。ま。の。天。下。を。曹。洪。が。さ。へ。く。ま。も。一。日。も。臣。公。す。く。ん。た。め。お。る。さ。う。ら。ず。と。て。馬。の。上。ま。り。入。の。せ。曹。身。り。甲。斐。を。お。ぎ。す。て。馳。し。こ。し。り。け。り。そ。で。お。四。夏。の。比。ま。ち。ま。り。て。敵。の。賊。の。こ。ゑ。こ。ら。う。し。こ。み。ひ。ま。て。追。手。の。勢。ぞ。で。ま。す。つ。つ。前。より。大。河。が。た。れ。て。白。浪。天。か。み。ま。さ。り。け。き。曹探。大。ら。ま。嘆。て。曰。く。曹。命。こ。ら。ま。い。た。ま。り。又。活。る。と。お。た。だ。す。曹洪。曰。く。早。く。馬。より。お。り。て。鎧。を。ぬ。か。す。ま。入。と。て。自。う。ふ。肩。より。引。け。大。河。を。や。す。く。と。と。り。岸。の。岩。う。と。ま。つ。り。み。つ。ひ。て。還。ら。ま。上。り。け。き。曹探。の。勢。ぞ。せ。きた。り。河。を。へ。こ。て。い。

矢をばさつ。曹操必死とのめれて走りけき。夜もやのく。と。め。け。と。る。れ。二十里をり。落ける所。小高き岡のうへより。賊を咽とつくりて。一手の勢。う。つ。り。る。曹探。お。ろ。ひ。て。こ。き。と。見。き。曹探。の。大。將。徐。榮。河。上。より。見。し。て。此。所。は。相。ま。ち。け。る。所。あり。其。勢。四。方。より。と。り。圍。んで。曹探。を。生。取。ん。と。す。る。所。も。夏。侯。惇。夏。侯。淵。十。餘。の。騎。を。ま。り。を。引。て。と。せ。きたり。徐榮が勢。ま。さ。つ。て。入。徐榮。大。い。お。怒。り。馬。を。う。つ。て。突。て。う。れ。れ。夏。侯。惇。鎧。を。提。げ。馬。を。ま。じ。へ。二三合。戦。う。ひ。ける。曹探。お。ろ。ひ。す。して。走。り。け。る。を。夏。侯。惇。お。つ。ひ。て。ま。し。こ。ろ。す。曹探。心。を。安。ん。じ。馬。を。と。や。め。て。馳。する。所。も。曹。仁。李。典。樂。進。等。お。ひ。く。と。尋。ね。ま。り。又。五。百。餘。騎。ま。り。け。れ。河。内。郡。を。陣。を。取。て。諸。方。の。勢。を。め。つ。め。け。る。

○袁紹孫堅擊三王

國の諸諸。洛陽に入て。みな焼わと。陣を取。孫堅の兵を下知して。火を滅させ。建章殿の舊跡。假屋をのまへ。士卒を分ちて。内裏の燒わと。掃ひ。清めさせける。先帝代々の宗廟。みな。堀。く。つ。して。目。め。わ。て。ら。れ。ぬ。体。な。り。け。き。曹。探。や。う。く。と。取。お。さ。め。假。三。間。の。宮。を。建。て。諸。侯。と。く。く。わ。つ。ま。り。太。半。を。と。な。へ。て。祭。を。お。し。み。ま。じ。が。陣。を。回。り。け。り。孫堅。その。夜。一。天。雲。を。と。て。星。月。の。光。輝。ひ。や。う。な。り。し。り。り。自。ら。劍。を。帶。て。建。章。殿。の。階。上。に。坐。し。天。文。と。仰。ぎ。見。る。ふ。紫。微。垣。の。中。白。氣。漫。たり。し。り。り。大。い。お。嘆。じて。曰。く。帝。星。明。ら。う。な。ら。ず。賊。臣。國。を。乱。り。万。民。塗。炭。の。苦。し。み。を。う。けて。洛。陽。の。宮。殿。く。く。の。ご。と。く。み。成。果。ら。う。と。て。そ。い。ろ。お。涙。を。お。が。し。け。き。曹。探。ら。お。る。軍。士。告。て。曰。く。お。れ。お。見。へ。る。殿。の。南。も。五。色。の。光。り。井。の。中。より。お。こ。り。ひ。孫。堅。お。や。し。み。火。炬。を。と。も。さ。せ。井。の。中。と。さ。さ。せ。け。き。曹。探。一。人。の。女。を。ひ。さ。わ。げ。り。り。ぞ。で。お。死。し。て。日。を。經。り。と。見。へ。ける。曹。探。の。屍。す。こ。し。も。た。ま。さ。ず。駿。東。ま。こ。と。お。尋。常。の。人。と。い。見。へ。る。曹。探。の。遺。體。を。頭。お。り。けて。兩。の。手。か。て。抱。へ。たり。し。り。り。曹。探。と。り。て。よ。く。見。る。ふ。紫。微。垣。の。系。を。以。て。龍。を。繪。も。の。せ。

りもし詐らばやうす運命つきて。人手よりりて亡びべし。劉表の笑て曰く汝小兒の戯むをぞやと云く。さやらの誓をさしむるべしとて。容易くこゝを通すべし。汝が軍中をわらうらむ我を獲らせむ。必よく通すべし。孫堅大いに立腹して。汝のうかれを我をうろんせるぞとて。馬を飛して切てり。劉表急に走りて。孫堅兵を引いて走らんとせむ。四方の伏勢一度おこり。禁錮。翻越兵と下知して。わささじと受けむ。孫堅が勢とく討せ程。黄蓋等も命をぞとて。圍を出。つりよ六七騎ありて。とうく江東へ逃りへり。こきより劉表と孫堅たぐひよ誓と結んで軍の絶ゆるひまもあし。

趙雲大戦二盤河

董卓を以て長安へ没落して。國の諸侯みちが領國よりへりければ。袁紹も河内郡まで引きむ。兵糧よとをりひて。冀州の太守韓馥を責と求めんとす。手下の大將逢紀といふものぞ。み出さる。大丈夫の士たるもの。大なる志を立て。天下は縦横をべしと。區々として人よ託て責を求むべけんや。夫冀州の富饒の地にして。金銀兵糧のりりて多し。將軍早くこの國を奪て。身を立るの本としむ。袁紹が曰く。いりある討ごとと用て。こきを取ん。逢紀が曰く。密に。北平の太守公孫瓚が方へ書簡を以て。冀州をとらむ。二つに分ち取んと云つ。のさ。彼のさすよるこんで。兵を起とべし。將軍又密に韓馥を内通し。まじ。韓馥もとより。臆病不智のものあり。のさ。將軍を頼むべし。そのと。計ごとと用て。奪んと奪ころの内あり。袁紹大いによるこ。即時よ北平へ書簡を送りけむ。公孫瓚は。見ら。共兵を起して。冀州を攻取んとのことありし。國と。ころ。率ひ。のさ。て。やがて兵を起し。袁紹こき。聞て。即ち冀州へ使を遣し。今北平の公孫瓚。其國を攻入んとす。御用

心あるべしと告りし。韓馥大いに。おとろ。荀彧郭圖等を召して。いり。せん。と。謀。荀彧。やける。公孫瓚。袁代の兵を起し。長く。攻。其。先。わ。り。た。し。孫。劉。玄。徳。關。羽。張。飛。と。世。よ。お。ろ。し。三。人。の。兵。も。あり。若。合。戦。及。び。あ。む。む。國。の。破。き。ん。と。目。前。あり。今。袁。紹。の。智。勇。人。も。超。て。手。下。の。名。將。其。數。を。し。ら。ず。こ。と。も。四。代。三。公。よ。昇。て。思。徳。を。四。海。よ。や。こ。し。万。民。の。望。む。所。の。人。よ。う。り。早。く。袁。紹。を。頼。む。り。と。も。國。を。守。り。ま。じ。公。孫。瓚。す。と。も。ひ。ま。じ。韓。馥。ま。つ。る。べ。し。と。同。じ。け。む。長。史。耿。武。と。い。ふ。もの。大。い。は。韓。馥。曰。く。袁。紹。今。勢。ひ。窮。り。力。盡。て。ひ。と。へ。む。と。鼻。息。を。仰。ぎ。願。む。小。兒。の。母。の。懷。ろ。抱。き。て。若。乳。を。飲。し。め。む。立。所。は。餓。死。と。る。が。と。し。何。ん。を。國。を。授。て。頼。む。の。理。わ。らん。や。是。ま。こ。と。は。虎。を。引。て。群。が。る。羊。の。中。へ。入。し。む。る。が。と。し。の。あ。ら。ず。此。事。を。休。ま。ま。へ。韓。馥。が。曰。く。君。を。本。の。袁。氏。の。家。より。出。る。もの。あり。況。や。才。能。袁。紹。及。ば。せ。古。へ。の。人。も。も。才。ある。もの。より。國。を。讓。る。汝。等。謀。む。る。と。さ。つ。と。て。別。無。圖。紀。と。い。ふ。もの。を。使。と。して。袁。紹。を。ぞ。ひ。り。へ。ける。冀。州。の。實。臣。是。を。見。て。國。の。滅。亡。ぞ。よ。至。き。り。さ。り。身。を。全。ふ。せ。ん。と。て。官。を。ぞ。と。て。還。を。去。る。もの。三。十。人。も。あ。ま。ま。り。と。れ。と。も。耿。武。の。忠。義。の。心。より。り。し。つ。つ。關。純。と。い。ふ。もの。を。語。ら。ひ。さ。か。と。ぞ。して。袁。紹。を。殺。さん。と。思。ひ。半。途。よ。出。て。木。陰。よ。う。く。れ。今。や。來。る。と。待。居。り。數。日。す。ぎ。て。袁。紹。兵。を。引。て。來。り。け。む。二。人。刀。を。提。さ。げ。て。斬。て。り。り。ける。と。袁。紹。が。大。將。顏。良。必。得。り。と。て。策。よ。さ。り。つ。つ。の。秋。武。を。斬。り。け。む。關。純。も。文。醜。を。討。き。よ。け。り。袁。紹。と。て。冀。州。よ。入。て。太守。韓。馥。を。責。責。將軍。を。封。じ。民。を。安。ん。じ。賢。を。相。ら。ひ。田。豐。沮。授。許。攸。逢。紀。等。を。重。く。用。て。國。の。政。ご。を。治。め。せ。け。と。も。權。柄。こ。と。く。袁。紹。よ。飯。して。韓。馥。の。在。と。も。さ。さ。と。く。成。て。今。こ。と。耿。武。が。謀。を。思。ひ。ま。り。て。後。悔。と。れ。と。も。及。び。心。の。内。日。夜。苦。し。んで。つ。つ。い。よ。妻。子。を。も。ら。ち。ぞ。て。只。一。人。陳。留。よ。行。て。太守。張。邈。を。頼。んで。居。り。ける。北。平。の。



公孫瓚の。此ときそで勢を精へて打出たるが。冀州之や袁紹が手よ入るを聞て。弟の公孫越を遣し。約束のごとく冀州を二つに分んと云。袁紹對面してヤたる。國を分り重きとあり。人傳より争の致さ。公孫瓚。自ら來らば。世をのちるす國を分たん。こきよよりて公孫越ひあしくへる所よ。半途よて一手の軍馬傍より打て出。世をのちる。卓よ仕しものどもあり。いま日比の仇をとぐと叫りて。四方より雨の降とく矢を放ちけり。公孫越ついで乱矢よ射ころさる。士卒。世のふ命をたどる。公孫瓚よ見へ右の趣きを語りけり。公孫瓚怒てやける。袁紹さきよ書簡を以て。とも冀州を分ち取んと云送り却て我を欺ひて國を奪ひ今又董卓勢と号して。世が弟を射殺せり。吾さんぞ坐あぐら辱しめを受ける忍んとて。直ち冀州をさして推よせたり。袁紹こきを聞てならば。打て出。敵ちりんとて。三手よ配て。盤河の橋より東よぞ陣をとりける。公孫瓚の橋より西よ馬を扣へて。自のら大音あてげ義よ背く賊。いつくも居ぞと叫りけり。袁紹馬を橋を上よりけり。公孫瓚不才よ冀州を保ことあらず。我を招て國を讓をり。汝いのされば。兵を起し來る。公孫瓚

怒て曰く。昔洛陽を攻りしとき。汝を忠義の人ありとして。共謀して盟主とす所よ。實に狼心狗幸の曲ものあり。何の面目ありて天地の間よ立んとしとる。袁紹左右を顧みて。誰のある奴を生取て舌をぬけと云けり。公孫瓚として身の長八尺をりある男の。面ハ盤のごとく色わくまで黒さ。馬をとをしてあけ出さる。公孫瓚も槍を燃て突出し。橋の上よて只二人二時ヨリ戦ひける。公孫瓚ついであはせ。馬をうつて走りけるを。文醜のさしと追のけ。直ち中軍へりけ入左よ突右よ突て。人あき所をめぐがごとし。北平の軍勢あへて奮るものあく。まどろよ成て見へたるを。公孫瓚が大将四人。とりまきて討んと四方より進みたるを。文醜とこしも畏む。黒烟を立て戦のふたり。まばらくありて。一人の大将餘よあたりて馬より落たるを。殘る三騎の大將叶のじとや思はん。馬をうつて逃とする。文醜勝よ乘て。公孫瓚を討んと馳まのりたるを。公孫瓚を冷して。山の間を走る所よ。文醜急よ追のけ。とみやの降らば命と扶けん。と叫りる聲。耳根よ△

△ひいきたるを。弓矢をのちる。ぐりぞて。逃けるよ。乘る



馬若も跌ら。膝を折てたやききさ。公孫瓚とて討さぬべく見へける所ふ。雖とも知らず。甲冑をも被さる大將の。一騎の鎧を提さげて走來り。文醜と火を散して戦ひひきさ。公孫瓚ふしぎの命をすりりて。山の上へ逃のぼる。文醜もやも退ぞりす。又七八十合戦ひひける。後より敵の大勢くるを見て。馬をりへして去むる。公孫瓚山を下りて。我を扶けたるもの何人ぞと問ふ。其人のたけ八尺。漢眉大眼。瀾面。帝顔。相親堂。威風凛々。常山真定の人よ。趙雲字の子龍といふものあり。公孫瓚問て曰く。御邊いのさればこの所も在て。我危ふさをぞくふたる。趙雲が曰く。某のもと。袁紹が手下の大將なり。し。袁紹民を恤さみ。漢を扶くる心さきを見て。この所へ逃來れり。わがわくの。仁徳の主も仕へて



とも天下の騎虎の苦みをぞくへん。公孫瓚大いふよろこび。本陣よりへりて。武具をとりのへ。次の日一色よ。白馬と二千疋とろへて。楚河の橋を張。又歩立の勢を中軍とし。馬強ある勢五千余騎を備へて。左右の羽翼とす。公孫瓚が多し。白馬を持たる。先年楚河の勢と戦ひ。常白馬をえらんで。先手としけるゆゑ。白馬將軍と号し

て畏きわへり。こき軍の吉例とぞ聞へし。袁紹これを望見て。まづ顔良。文醜二人を先手の大將とし。屈強の射手。千余騎を左右に備へ。又趙雲といふ大將よ。北國無双の射手。八百余騎をつけて中軍とし。袁紹自ら後陣に備。公孫瓚のいま。趙雲が心根をしらざれば。まづと後陣に備て。大將嚴綱を先手とし。帥の字を金線かて結る。紅赤ひの旗を立たがいゝるを相待。辰の刻より己の刻ひゝる。袁紹が大將趙雲の前。疊橋一面ふつきさかへ。射手を其のげあつくして出ざりければ。公孫瓚後方をへりみて。離りまづ是敵を破らんといふ。先手の大將嚴綱兵を引て討てりゝる。されども趙雲の静まりへりて音もせさ。そでちうり。とよりけると。合圍の鉄炮をあらぞやとこそあれ。八百の勢鐵をそろへて。敵にお射しとぞまもさく討てりりければ。嚴綱廻りそくさみ討たれ。とら。くお退ざらざるを。趙雲八百余騎かて追りけ。嚴綱を切てかす。是より公孫瓚が先陣す。破きたれば。左右に備たる五千余騎。これをぞくへんとする所。顔良。文醜千余騎かて襲てりり。四角八方へかけちらして。わたかも電光の激するごとくありしか。五千余騎の勢十方お討ちらされ。又一所おのりつまり得。袁紹勝か乗て橋の上まで攻よせ。趙雲先かす。んで。帥の字の旗をさりておとしけさ。公孫瓚大お怒て。白馬をまじへて。二三合戦かひけるが。かありてして。引退け。趙雲いよく。氣を乗て。後陣の備ふりつてかゝる。此陣お趙雲五百余騎かて備たる。味方引どもあへて動。敵かれどもさらお畏。湛然として兵を一所おわつめ。趙雲が討てかゝるを見て。趙雲自ら十合戦かひ。一騎お趙雲を馬より突て落した。ちち。大勢の中へかけ入。左お追かひけ。右お追まひし。敵を討と數をしらす。血の混として溝をさし。屍の疊々として丘のごとし。公孫瓚のこじめ散る。負て走りける。後陣の軍も味方勝りいとふを聞て。急お取てかへしけさ。敵軍大いお乱きて。右往左往おち

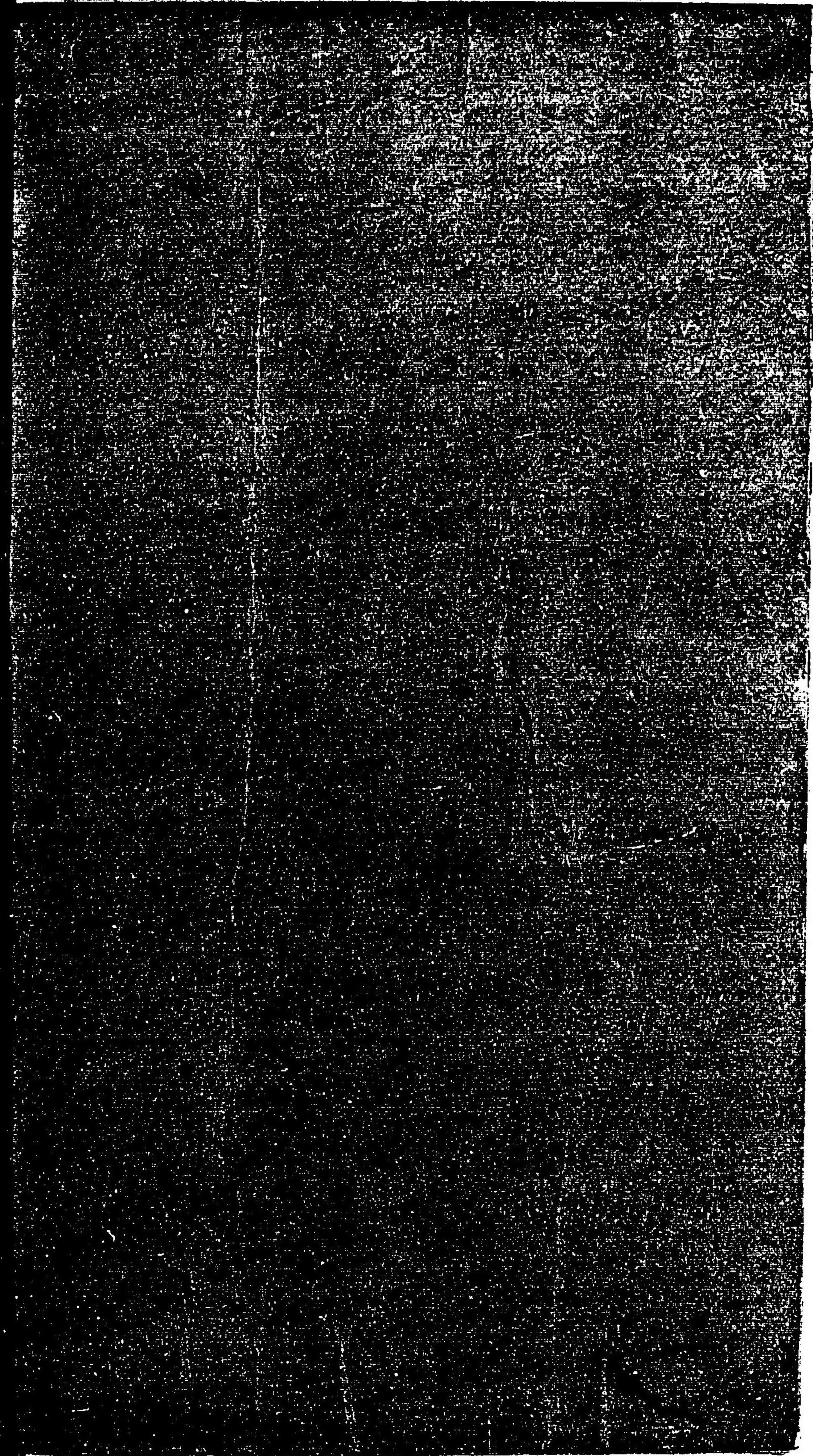
てゆく。袁紹とつかふ。三百余騎を従ぐへ。射手五十人を左右に立て。大將田豊と馬をさぐべ。初め公孫瓚が大將を討き。旗を折れたるを見て。公孫瓚のさしも無能なる大將か。此軍の体を見よといふて笑て居たる所。思もよ。中趙雲が。五百余騎めて。勝に乗て攻かへり。矢を放つと雨のごとくありしか。袁紹腹をひやして。いかいせんと騒ぐ所。公孫瓚又大勢を引て四方を圍みければ。田豊ふるひ怕き。袁紹向てすける。四方をとり巻て矢を放つと雨よりもまげし。われある築地の陰に入てこきを避ん。袁紹被る盔を脱で地あげそて。大丈夫の士の。戰場の討死をこそ本意あれ。何ぞ身をなけて。活ることを望まんと叫り。自ら眞先馬を出せば。其手の兵さびあ命をかるんじ。喚き叫んで攻戦かふ。活る所初め北の敵を追る。顔良。文醜が千余騎の勢。あとお戦かひわりと聞てそみやか。取てかへし。賊をどつとわけて。驚さうしか。公孫瓚。又さんく。ふ亂きて。趙雲と一手あり。橋の邊まで退ざさける。袁紹が大軍勢ひふ乗て追かけしか。河中に追落されて溺死するもの數をしらす。袁紹自ら馬ととべして。一騎もあまさを討とを叫り。又五里あり。遂所。山の間より一彪の軍馬うつて出。眞先す。ひり。左右の手を剣を提さげて。是とあり。劉玄德あり。其あとお關羽。八十二斤の青龍刀を提さげ。張飛一丈八尺の蛇矛をよこへ。我平原より来て公孫瓚を助く。袁紹早く降参せよと叫りけり。袁紹おどろき。騒ぎ。そのや例の劉玄德よ。そみやうは退けといふはどことわき。大いふ亂れて人馬さぐい踏殺され。甲をすて。盔をかとし。散々よぞ落めさける。公孫瓚十分打勝。本陣よりへりて。玄德を持さし。趙雲が功を物語しけり。玄德も心の内。趙雲が人表薄情さるるを敬ひ。趙雲も玄德を見て。實よよま主君うると思ひ。是互よそてさるの意あり。繪本通俗三國志初編卷之一終

明治十五年十一月十六日翻刻御届
十二月一日出版發賣

原板人 東京府平民 不詳
鵜刻人 岩城勝藏
發兌 京橋弓町 十二番地 著作館

稟告 豫て諸新聞紙上を以て御報達申候繪本通俗三國志初編製本出来
よ付本日より遠近の賛成員諸君へ御送本申上候將本書出版之儀。外よ
運延候共爾來は手配之上迅速出版發行相成候様可仕候間幸よ函海是所
る全貳編は本月中旬發行の筈南総里見八犬傳初輯の已よ出版全貳輯 全
本月中旬發行可致候事
○今般當館發起人協議の上漢籍部を設け専ら漢籍の出版發行の業よ従事
し況く賛成員を募り廉價を以て之を頒んとす願よ同憲賛成あらんを企
圖よ猶漢籍部規則見本を要せらる各位の郵税封入(府下一錢府外二錢)御
通知次第進呈可仕候

本館漢籍部第一回着手書目
○校正 新刻文選正文 册十三
○先哲叢談全後編 册合九
○韓非子 册十 以上三書共木板于摺るり精委細の
方法は漢籍部規則よあり



特40

23

089237-001-6

特40-23

繪本通俗三国志

第一卷 第二卷 第三卷

葛飾 戴斗/画

M15-16

DBM-0474

